
コードギアス反逆のルルーシュ 幻影のライ

サカガミ ヤスヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス反逆のルルーシュ 幻影のライ

【Zコード】

Z1954F

【作者名】

サカガミ ヤスヒロ

【あらすじ】

テロに巻き込まれたルルーシュが王の力、ギアスを手に入れたことから、反逆を開始する。「スーパー口ボット大戦G・U・に準拠のコードギアスエースストーリー。ゲーム版の主人公のオリキヤラ化、それに伴う所々の修正はありますが、ほとんど本編準拠。なので、詳しく知りたい方は公式サイトへどうぞ。」

STAGE1・監視者 part1（前書き）

あらすじにも書きましたが、コードギアスのエフストーリーです。修正を入れていない箇所は本編準拠なので、カットしています。ですから、本編を見ていないと、解らない箇所があるかもしません。

御要望があれば、そこも追加したいとは思います。

その日、僕は生徒会メンバーと一緒に昼食をとつていた。男子生徒は僕一人なので、周りから見ればちょっととしたハーレムだが、実際はそうでもない。

「そう言えば、ルルーシュとリヴァルは？」

和やかに進んでいた会話は僕の一言でここにはいない一人の男子生徒の話題へと移つていった。

「ルルーシュをリヴァルが連れだしてゐる。」

ちょっと落胆した様子な女の子、シャーリー・フネットが愚痴る。それに応じたのは我が アッシュフォード学園の生徒会長、ミレイ・アッシュフォードだ。名字で分かるように彼女はこの経営者、アッシュフォード家の間間である。

「また代打ち？ チエスかな？ それともポーカー……」

「二人とも生徒会の自覚ないんだから。お金賭けてるんですよ？ 頭いいのにルルは使いかたおかしいんです。ちゃんと勉強すれば成績だつて……。だいたい、ライ君は仕事しながら学校に来ていて、なおかつ成績いいんですよ。ルルはもつと楽なはずです。ライ君もそう思わない？」

かわいい顔をむつとさせながら、僕に訴えかけるシャーリー、ああ、ルルーシュ君は幸せ者だよ、こんなかわいい子に、心配してもらえるなんて……。

そんなことを考えながら僕は同意する。

「確かに、一理あるね。」

「でしょ？」

「うちのルルちゃんは、本当はまじめな子なのに？ かわいいねえ。」

そうやってシャーリーを茶化すミレイさんも、ルルーシュのことについて黙認している。学生が賭けをやつていてるなんて知れたら、大事なのにも関わらず。

やつぱり、ルルーシュのことを想つてゐるのだろうか？・・・普段が普段だけになんとも言い難いが。まあ、気があつてもおかしくないだらう。

というわけで、女性一人はルルーシュのことが気になつていて、さらに、さつきから喋つていない、メガネの女の子、ニーナ・アインショタインは男性よりも本や研究が好きそのので、結果的に僕はハーレムでも何でもない。

まあ、どうでもいいことかもしれない。こつやつて、楽しく会話で来ているだけでも、よしとしよう。

突然、携帯が鳴つた。相手は仕事先の上司からだつた。一度携帯を切る。

「すみません。ミレイさん。軍から呼び出しが掛かりました。」

「あら、残念ね。午後の授業は出られそう？」

「いえ、残念ながら無理でしそう。先生方には・・・。」

「ええ、連絡しておくれわ。」

「はい、お願ひします。」

そう言つて、僕はその場を後にする。そして、携帯を掛け直した。口調を仕事のそれへと変化させる。

「ああ、私だ。すぐにそちらに向かう。」

ライがその場を去ると、シャーリーは誰にともなくつぶやいた。

「ほんと、ルルもライ君見たいに真面目に生きればいいのに。」

「ほんとよねえ。いつぞ、ライ君に乗り換えちゃえば？」

「何言つてるんですか、会長！？そりやあ、ライ君はかつこいいし、真面目だし、運動できるし・・・。でも、私は彼のことをそういう風には・・・。」

シャーリーはあわてた様子で、ミレイの言葉に答える。シャーリーの言つたことは事実である。実際、彼にはファンクラブさえ存在し、その女性人気はルルーシュと互角だ。

「冗談よ。あなたがルルに夢中なのは火を見るより明らかだから。」

ミレイがほほ笑みながら呟つと、シャーリーは顔を真っ赤にしながら、俯いてしまった。

二ーナだけがキヨトンとしながら、「」飯を食べていた。

STAGE 1・監視者 part 1 (後書き)

お楽しみいただけましたでしょうか?
文才がすごいので、うまく伝わっていると嬉しいです。

「ロイド博士。見つかったようですね。」

「ようやくね。これで、君の専用機も作り始められるよ。」

ロイド博士は嬉々としている。

「でも、よろしいんですか？その、日本人をデヴァイサーにしてしまって。」

現場に向かうトレーラーの中で、僕は詳細を聞いていたのだが、セシルさんは何か問題があるような口調だ。

それにもしても、僕の前だからって、日本人なんて言う必要ないのに、気を使っているのだろうか？

「別に、問題ないでしょ。能力がある者ならだれでもよいと、指示を出したのですから。」

「それなら、構わないのですけど・・・。」

セシルさんは、僕の言葉に納得してくれたが、しかし、彼女の言うことも一理ある。これはブリタニアの国是に抵触することだからだ。まあ、いいわけならいくらでも思いつくので、全く気にしてはいないし。それに、目的のためにには日本人の方がいい。

「それで、どうします？ストライド卿」

「そうですね。変に委縮されても困りますし、僕の身分は隠しますよ。」

「わかりました。じゃあ、それ用の口調でお願いしますよ？」

「わかつてますよ。お一人の方もよろしくお願ひしますね。」

僕の身分を隠すことは、前々から話し合っていたことだ。

まず、自慢ではないが、僕自身、かなり高いポストに就いているつまり、命を狙われる可能性が高いのである。さらに、身分を公表すると厄介なことになる任務にも就いているからだ。

それに、その日本人のデヴァイサーとも仲良くしたいしね。

現場についてみると、事態は全く予想外の方向に向かっていた。

「どうやら、前線に投入されたようですね……。」

「ロイドさん。ちゃんと手配してくださいよ。」

セシルさんの報告を聞いて、僕はひどく落胆してしまった。前線投入ともなれば、死亡する確率は高くなるし、毒ガスが散布されているという情報もある。

「したよ。でも、仕方ないでしょ。はあ、でも、デヴァイサーがないんじゃないかな……。」

ロイドさんもがっくり来ているようだ。

「仕方ない。僕の名前を出して、救援を……」

そこに一人の兵士が駆け込んできた。

「榎木スザクと思われる男を確保しました。」

ふうと胸をなでおろしたが、その次の言葉を聞いて、愕然となる。

「しかし、銃で撃たれています。いかがいたしますか？」

「何！？すぐに救護を。出来れば、こちらのトレーラーに運んでくれ。」

「イエス、マイ・ロード。」

兵士は駆け足で去つていった。僕はロイドさんとセシルさんに田線を向けて、意見を求める。

「私は、中止すべきだと思います。けが人を乗せるなんてできません。」

セシルさんは真剣に言つてくる。僕もそれに同感だ。僕の専用機はゆっくり作つていけばいいのだから。でも、ロイドさんは反対だろうな。

「僕は、実行したいな。めつたにない機会だからね。」

「こちらも、正論。ゆっくり作つていけばいいといつても、完成しないのでは意味がない。セシルさんが食つてかかる。」

「けど、ロイドさん！」

「だけどね、これ、最終的にはライ君の判断だから……。」

その通りだ。これは、僕が決めるべき問題だ。だけど、けがをし

ている人間を乗せるのはどうしても気がひけた。だから・・・。

「ロイドさん。榎木一等兵にデヴァイサーの話は?」

「してないけど?」

「わかりました。それじゃあ、彼自身に決めてもらいましょう。乗るか、乗らないか。」

僕は卑怯なのだろう。でも、これは重要なことだ。そう、乗るのだとしたら、彼の運命は確実にこじれていくだろうから。それを強制してはいけない。

「日本人の虐殺を黙認しておいて、最初から強制的に乗せるつもりだつたやつが何を考えてるんだろう。」

「ライ君。なにか言った?」

セシルさんが怪訝な顔をしている。口に出でいたようだ。僕は笑顔で答える。

「大丈夫です。なんでもありません。」

幸いにも、榎木の怪我は銃で撃たれたにしては軽微だった。これで、罪悪感も少しば減るというものだ。とことん僕はひどい奴だな・・・。

「まだ、起きそつにないねえ。」

早く、ランスロットを動かしたいのだろう。ロイドさんの言葉にうずうずとしたものを感じる。

「このままだと、戦闘終わっちゃうよ。」

「それはそれで、仕方ないんじゃないですか?けが人を乗せなくて済みますし。」

まあ、その時はその時だ。しかし、セシルさんは、本当にやさしい人だ。そして、聰明で美人だから、引く手数多なんだろうな、料理のセンスさえ悪くなれば・・・。思い出すと気分が・・・。

「何か?」

セシルさんににらまれる僕。笑顔が怖いです。

「いえ、セシルさんは優しいなと思つただけです。」

「・・・それならいいですけど。」

納得はしていただけたようだ。

「うーん。」

ベッド替わりのベンチから、唸り声がする。会話がつむさかつたのか、枢木が起きたようだ。

「残念でした！天国に行きそびれたようだね。枢木一等兵。」
枢木はキヨトンとしながら、ここはどこか尋ねてきた。それに答えるながら、ロイドさんと、セシルさんが枢木のおかれた状況を説明していく。

その中で僕は、気になる発言を耳にした。

「ルル・・・・、状況はどうなりましたか？」

「ルル？ルルーシュのことか？まさかな、日本人で彼と接点があるのは、・・・まさか、だが、辻褄は合つな。まったく、これは何の因果だというんだ。」

「で、この子が君と同じデヴァイサーのライ君よ。」

「はじめまして、よろしく頼むよ。枢木スザク君。」

「いらっしゃい、よろしくお願ひします。」

それでも僕は笑顔であいさつした。それにスザクも快く応じてくれた。

STAGE 1・監視者 part 3

ロイドさんたちがランスロットの準備へ向かつたあと、僕だけはその場に残つた。質問をしておかなければならぬ、先ほどの発言について。

そして、ランスロットに乗る、覚悟について・・・。

「もう一度聞くけど、言いのかい？ランスロットに乗るということは、完全に日本と敵対するってことだけだ。」

僕の言葉にマニユアルを読む手を休め、こちらを向くスザク。
「ああ。それに、僕は名誉ブリタニア人だ。そして、軍に入つてい
る。もう、日本は裏切つているも同然だからね・・・。それよりも、
君はちゃんと日本と呼ぶんだね。」

その言葉に、最初の方は一抹の悲しさを感じさせたが、最後の方
は単純に驚いている様子だつた。顔にもその表情が浮かんでいる。
「珍しいかい？僕はブリタニア人と日本人のハーフなんだよ。」

僕は、自嘲気味に答える。

「そうか。それじゃあ、納得だ。」

僕は、内心で驚いていた。ハーフといつのは微妙な立場で、優秀
でなければ、向けられる感情は侮蔑か、哀れみなのだ。優秀であつ
ても、優秀であるがゆえに孤独になる。

日本人からは、憎悪を向けられる。名誉ブリタニア人制度で、ブ
リタニア国籍を取得した人間と同じ目で見られる。

だから、スザクのように単純に納得するのは珍しい。ジノやアッ
シュフォード学園の生徒や、特派の人たちもいるけれど、やはり、
少数だ。

スザクは優しい人間なのだろう。

僕は、それを考えた上で、こう告げる。

「じゃあ、君は、日本人を殺す覚悟はあるかい？」

スザクは逡巡したようだが、返答してくれた。

「ああ、さつかも言つたけど、僕は裏切つているも同然だよ。だから、命令ならば殺すこともある。」

その言葉には、覚悟がにじみ出でていた。僕は悪いことをしたと思い弁解する。

「ごめん。確かに、今日みたいに戦闘に出る」ともあるけど、基本的には技術開発だから。そこまで気にする必要は無いよ。」「でも、開発するのは、兵器だろ？」

確かに、その通り。そこまでわかつてゐるなら、もうこれ以上、聞く必要はないだろう。眞面目なやつだ。そこが、長所だらうけど、融通がきかないところもありそうだ。

「その通り。わかつてゐるならいいんだ。とにかく、さつきの、ルルつていつのは君の友達かい？」

「え？」

先ほどどいい、顔に出やすい性分なのだろうか。とても、驚いているようだ。

「なんのことかな？」

しらを切るつもりだらうか。驚いた表情を見せた後に言つても、説得力はないぞ。

「そうかい？僕はてつきり、友達かと思つたんだけど。」「

「僕はそんな人、知らない。」

「人のかい？ルルというのは？動物とかじやなくて？」

しまつたという、顔をするスザク。単純な誘導尋問だ。こんなにあつたり引っかかるとは思わなかつたが・・・。

「実を言つとね、僕は君の言つたルルに心当たりがあるんだよ。だから、僕も心配なんだ。だから、教えてほしい。何が起こつてゐるのか。」

スザクは、かなり悩んでいるようだ。それは、そうだろう。死亡したはずのルルーシュの存在を明かしたら、彼とその妹が政治利用されるかもしれないからだ。

まあ、実際僕も同じようなものだが。

「わかった。話すよ。」

スザクは話してくれるようだ。しかし、人を簡単に信用し過ぎるな、スザクは、後々それがまだにならなければいいんだが・・・。でも、僕を信用してくれるのはありがたいことだ。

スザクが話してくれた人物は、間違いなく、ルルーシュだった。だが、これでは・・・。ああ、ナナリーには何と言えばいいのだろうか。

「そうか、話してくれて、ありがとう。」

それで、いつたん会話は途切れた。僕が黙り込んでしまったからだ。スザクもマニアカルを読まなくてはいけなかつたのでなおさらだつた。

しばらくして、スザクを残して僕は外へ出た。そして、携帯を手に取る。ナナリーにもだが、その前に伝えなくてはならない。

「もしもし? シャーリー? 実はルルーシュのことなんだが・・・。」

「あ、ライ君? 聞いてよ。ついさっきルルーシュから電話があつてさ。」

「それ本当! ?」

「びっくりした。本当だよ。嘘ついてもしょうがないじゃん。」

つい、大声を出してしまつた。よかつた。少なくとも、まだ生きているらしい。

「ごめん。それならいいんだ。ルルーシュはなにか言つてた?」

「それが、新宿付近のことについて、ニュースで流れてないかって聞かれて、交通規制だけつて言つたら、切つちやつたんだ。」

「ルルーシュの奴、遅くなつた言い訳にでもするつもりかな?」

「そうかも。今度ライ君からも何か言つてやつてね。」

「ああ、そうするよ。じゃあ、仕事に戻らなくちゃいけないから。切るね。」

「うん。ばいばい。」

軽く会話を続けてから、電話を切る。深呼吸をし、気持ちを落ち

着ける。よし、大丈夫。

今 情報から推察するに、ルルーシュは無事なのだ。シャーリーとの会話にも不自然さは無かつたようだから、けがもしていなはずだ。

しかし、確実にこの新宿ゲッターにいる。もし、いないのなら、新宿の情報なんて求めたりしないだろうからな、彼は。確証は全くないが、確率は高いはずだ。そもそも、この状態のゲッターから抜け出せたとは考えにくい。

情報をまとめていると、スザクがトレーラーから出てきた。ランスロットの準備が整つたのだろう。

「スザク君。朗報だ。ルルーシュは生きてるよ。」

「本当にですか。よかったです。」

スザクは素直に喜んでいた。本当にいいやつだよ。君は。

「じゃあ、なおのこと戦闘を早く終わらせないと。」

「無茶はするなよ。」

「ええ、ありがとうございます。」

スザクははつきりと答えると、しつかりとした足取りでランスロットに向かっていく。傷は疼くはずなのだが……。

「止めるのも野暮だよな……。」

そうして、僕もランスロットのデータを見るため、ロイドさんとセシルさんのところへ駆け足で向かつた。

「あはははーいきなり、フルスロットルか。」

ロイドさんはとても愉快そうに、その光景を見ている。僕もその光景を目に焼き付けずにはいられなかつた。従来のナイトメアをはるかに凌駕するスピード。発進時の風で、セシルさんは立つていられないほどだつた。

「すごいですね・・・。これで試作ですか？」

「ふふふ・・・。すごいでしょう！君の専用機もこれを基本にするからね。すごいことになるよ！」

どんな、機体になるのだらう。楽しみではあるが、若干不安でもある。

そうしている間にも、ランスロットは戦闘域へと突入し、一機目を撃破した。

その戦闘でランスロットは化け物じみた活躍をしたが、それは戦術的勝利でしかなかつた。クロヴィス皇子から停戦命令が発せられ、戦闘は停止。おそらくその直後に、皇子は殺されてしまつた。

「申し訳ございません。陛下。」

皇帝陛下との専用チャンネルで僕は謝罪した。しかし、陛下の言葉は叱責ではなかつた。

「よい。過ぎてしまったことはどうにもできん。それよりも、ルルーシュとナナリーは無事なのだな？」

「はい。」

僕は、暗澹たる思いだつた。ルルーシュとナナリーのひいきが過ぎる。わからないでもないが、しかし、これではクロヴィス殿下が浮かばれない。

「そつか・・・。次の総督だが、コーネリアを差し向けようと思つ。それまでは代理の男に任せよ。引き続き、任務を頼むぞ。我が騎士、

ナイト・オブ・ファイブ。ライ・ストレイドよ。」

「イエス、ユア・マジエスティ」

そう言って、通信は切れた。そして、僕も部屋を退出する。

あとには静けさだけが残される。嵐の前の静けさが・・・。

STAGE 2・決意と魔法 part 1

僕はイライラしながら、校舎内を歩いていた。純血派のジョーレニア卿が、あらうことかスザクをクロヴィス皇子殺害犯として、拘束してしまったのだ。

そして、僕やロイドさんの証言は無視するところなのだ。ムカつかずにはいられない。

何が『あなたはストレイド公爵の御子息ではありますが、あなた自身がその権威を振りかざしていいわけではない。』だ。正論だが、僕が言っているのはそんなことではない！！

ああ、ナイト・オブ・ラウンズの権限を使ってしまおうか・・・。そんなことを考えながら、生徒会室に入ると、何やら書類仕事に悪戦苦闘している、ルルーシュ達の姿が目に留まる。僕は素早く身をひるがえしたが、遅かった。

「おはよう。ライ君。丁度いいところに来ててくれたわ。」

振り向けば、ミレイ会長の笑顔と、みんなの残念そうな顔。

「はは、逃げられないですか。そうですか。」

こつして、僕も部活の予算を計算させられる羽目になるのだった。それっきりのイライラは忘却するしかなかつた。

なんとか、予算編成を終えて、僕たちは教室にやつてきた。すると、数人の生徒がパソコンでテレビを見ながら、話している。どうやら、昨日の騒ぎについてのようだ。

先ほどの、イライラがよみがえつてくる。まったく、汚職でもしていってくれれば楽なのだが、あいにくとそんな情報はない。純血というだけあって、その身も清廉潔白らしい。だからこそ、よけいにイラつく、この状況を開きできない自分にだ。

「新宿？」

「昨日、この件で電話したんだよ。知り合いからリアルタイムで聞

いて。」

シャーリーが何か気付いたようにルルーシュに目を向けると、彼はこともなげに、嘘をついた。

そう言えば、ルルーシュはどうやって、ゲットーから脱出したのだろう。謎だ。

「ふーん、その知り合いつて・・・、大丈夫か？」

僕が問いただそうと目を向けると、ルルーシュが口を押さえていた。気分でも悪いのだろうか？ 生徒会室にいるときは平然としていたが・・・。

「大丈夫だ。朝から仕事をさせられて、少し疲れただけだから。」

「無理すんなよ。お前、体力ないんだから。」

リヴァルの気遣いに笑顔で答えながら、ルルーシュは洗面所で顔を洗つてくると言つて、荷物を僕に預けて、その場を離れた。

ゲットーを抜け出すときに、死体でも見たのを思い出したか、あるいは・・・。

いや、それはないだろ。動機ならあるかもしれないが、手段がない。ルルーシュが魔法でも使えるなら話は別だらうが・・・。

僕と、リヴァルが会話をしていると、珍しい光景が目に飛び込んできた。学校にはほとんど出てきていない少女が登校してきたのだ。彼女が着席すると、彼女と仲の良い生徒がよつていつた。久しぶりの再会を喜んでいるように見える。

少女の名を、カレン・シュタットフェルト。『名は体を表す』を地で行く、病弱なお嬢様だ。

「珍しいな、明日は雨か？」

「そんなこと言つちやてえ、気になつてるんだり？」

リヴァルのニヤニヤ顔に苦笑しながら僕は答える。

「まあね。きれいだし、それに、秘密のある女性って魅力的じゃないか？」

僕がこの学園に来た時、始業式以来だが、彼女を目にすることは

なかつた。それが、何らかの秘密がある様に感じさせたのだ。全くの、妄想だが……。

「全面的に同意だ。お互い頑張ろうぜ。」

リヴァルの意中の相手は、ミレイ会長だ。確かに彼女も秘密を隠し持つていそうではある。

「ああ、そうだな、健闘を祈るよ。」

ただ、気づいてるカリヴァル？会長はルルーシュのことが気になつてゐかもしない。という言葉は呑み込んで、僕は素直に応援する。

そこにルルーシュが戻つてくる。なぜか、彼はカレンの方を向いていた。

今のルルーシュは妹のナナリー以外は眼中にないだろうから、珍しいだけだろう・・・。シャーリー、君は哀れすぎる・・・。

「ひょっとして、惚れちゃつた？それじゃあ・・・」

リヴァルも見当違ひだ。ルルーシュという人間の本質に気付いていない。いや、むしろ気付かない方が幸せかも知れないが・・・。

「違うよ。珍しいだけだ。」

やつぱりな。あ、シャーリーがこつちを見ている。でも、ルルーシュは気づいてない。ますます哀れだ・・・。

「ところで、さつき聞こうと思つたんだけど、ゲットーの事を教えたのつて誰なんだ？」

話を転換させてくて、僕はさつきの質問をぶつけてみた。

「軍にチエス仲間がいてね。その人が教えてくれたんだよ。」

ルルーシュは冷静に返してくる。

貴族と賭けチエスをしてるくらいだ。ない話ではない。

「どこまで、聞いたんだい？」

「詳細は教えてくれなかつたよ。軍規違反になるかも知れないからつてさ。」

「一応、名前を教えてくれないか？」

軍規違反に近いことをしたのだから、注意しておきたかった。実

際にそんな人物がいればだが……。

「ライが軍に報告しないならね。」

「僕がまじめなのは知ってるだろ?」

「それじゃ、ダメだ。」

「わかった。それじゃあ、別にいいよ。」

うまい切り返しだった。これでは僕も引き下がらざるを得ない。

いつもながらに、ルルーシュには恐れ入る。

だからこそ、疑念は深まってしまったのだが……。

昼食をとり、理科準備室に行く途中、中庭にカレンの姿を見つけた。しかし、その姿は僕を含めて、学園生徒全員のイメージとは全く逆のものだった。

目の錯覚だろうか。今、蜂を手でたたき落としていたように見えたが……。何やら本当に秘密があるのだろうか。それとも、どうさに?

僕が考え込んでいると、今度はルルーシュがカレンのそばに近づいていくのが見えた。一人は一言二言を交わしている。

ルルーシュは一体何を考えているんだろう。まあ、彼も男の子だからと理由でいいような気もするが、やっぱり違和感がある。

再び目をやると、ルルーシュとカレンはいなくなっていた。僕も、

その場を後にする。授業に遅れるとまずい。

STAGE 2・決意と魔法 part 2

その数日後、僕は二つの衝撃に襲われた。ひとつは、純血派によるクロヴィス殿下の遺体奪取。これは、予測の範囲内ではあつたが、それでも、衝撃的な物だった。そして、もう一つは……。

「会長、ライ君。実は……」

会長に相談事を持ちかけていたら、元気のないシャーリーがやってきて、告げられたその発言だった。

「ルルーシュがカレンを誘った？」

僕はほほ、棒読みの状態だ。ルルーシュも人の子だったといつことよりも、先を越された感が大きい。しかし、ミレイさんは余裕の表情だ。さすがといったところか。

「多分、クラブハウスに連れてきてくれるんじゃないかしら？」

その言葉の訳が分からずに、キヨトンとなる。

「なんの話ですか？」

僕の疑問をすかさずシャーリーが口にしてくれた。そして、すぐさま、ミレイさんはその疑問に答えてくれた。

「歓迎会をするのよ。カレンのね。」

「なるほど。そのための料理ですか。」

調理場にはかなりの料理が出来上がっていた。

「ああ、私の早とちりか……。」

シャーリーも自分なりに納得したようだ。少し、バツの悪い顔をしている。

「わかりました。でも、一人で運ぶのは大変でしょう？ 手伝いますよ。」

「お、助かる。じゃあ、シャーリーは先に行って、リヴァルと二人の手伝いをして。探し物があるみたいだから。」

「はーい。」

元気よく返事をして、調理場を出していく、シャーリー。そして、

その足音が消えたころ僕は再び切り出した。

「さつきの続きですけど、僕は、どうするべきでしょうか？」

「そうねえ。助けたいんなら、助けちゃえればいいんじゃない？助けなくて後悔するよりずっとましよ。そう、ずっとね。」

口調は軽い物だったが、ミレイさんの言葉は、重く響いた。そうだ。僕は後悔したくない。彼を失うのは目的のためにもかなりの痛手だし……。

「ありがとうございます。参考になりました。」

僕は料理をワゴンに載せながら、お礼を言ひ、背中合わせのため、彼女の表情は見えない。

「どういたしまして。でも、たいしたこと言ひてないから、ひとつ、おまじないをかけてあげるわ。・・・ガツーッ！」

僕の背中にかけられたその言葉は僕の決意を固めさせてくれた。

僕は振り返って、最高の笑顔で告げる。

「ありがとう」

僕とミレイさんがクラブハウスに入ると、ルルーシュとカレンはキヨトンとしていた。

あれ？ 聞いてたんじゃないの？

「あれ？ 知つて連れてきてくれたんじゃないの？」

おいおい、ミレイさん。それじゃあ、やつぱり、ルルーシュはカレンを好きってことか？ そうなのか？

まあ、それなら奪い取るだけだ。って、僕は何を考えてるんだ？

料理を並べながら、ミレイさんが経緯を解説し、自己紹介をしてから、僕に話を振った。

「ライ・ストレイドです。カレンさん。あなたの加入を心から歓迎します。」

ちよつときぞりぽかつたかな？

そのあと、みんなが自己紹介して、会は滞りなく行われるかに思われたが、そとはならなかつた。

カレンがシャンパンを頭からかぶってしまったからだ。

余談だが、ナナリーが出てきた時の言動はやはり、ルルーシュがナナリーのことしか頭にないような気させた。

十数分後、シャンパンを浴びて、びしょ濡れになったカレンが着替え終え、戻ってきた。暇つぶしのために見ていたテレビでは、報道特別番組が流れている。内容は、クロヴィス殿下の殺害。そして、その実行犯の逮捕だった。

僕以外の全員がそのニュースに驚いている。なかでも、ルルーシュの驚きようは半端なかつた。

スザクが逮捕されたんだ。びっくりもするだろ？

僕が一人の関係を詳しく知ったのは、面会時間にスザクに直接聞いたからで、スザクは拘束されていてもルルーシュの無事を喜んでいた。

そして、スザクはこうも言っていた。眞実が明かされるのが法廷で、そうでないなら、そうでない世界なら未練はない。そんな悲しいことを言っていたんだ。

そのことを思い出し、僕は、再び覚悟を強固にする。そう、僕は君の無実を知っている。

君は必ず救い出す！！

「本当にやるのかい？」

ロイドさんは呆れているのだろうか。諦めているのだろうか。静かな言葉で声をかけてくる。僕は、専用に改良されたグロースターに乗り込んで準備を進めながら、ロイドさんの言葉に心静かに答える。決心が揺らぐことはない。

「はい。すみません。結局、身分を名乗ることになりそうだ。」

「もつと、穩便なやり方はないの？」

セシルさんは心配なのだろう。声にも顔にもその感情がにじみ出している。

「大丈夫ですよ。一応、ナイト・オブ・ラウンズの端くれですから。」

「 そうだ、僕はナイト・オブ・ラウンズ。ラウンズの戦場に敗北はない。そう自分に言い聞かせ、気持ちを鼓舞する。

作戦はこうだ。スザクは今夜、軍事法廷に移送される。僕は軍事法廷の目の前に陣取り、一騎打ちの決闘にて、スザクの解放を要求する。もちろん、このときにナイト・オブ・ラウンズであることを明かす。

もしかしたら、それだけで済むかもしれないが、おそらくそれはならないだろう。僕がナイト・オブ・ラウンズであることはまだ発表されていない。一部の人間だけが知る事だからだ。

しかし、失敗はあり得ない。ジョレミアという男は必ず、この要求をのむはずだ。

まず、いいのか悪いのかは別として、彼は純粹な騎士であるから、決闘は神聖なものであり、そこでの約束は絶対であるはず。そして、ナイト・オブ・ラウンズを騙つていると判断すれば、なおのこと成敗しようと決闘にのつてくるはずだ。

まあ、騎士の誇りもなく、ただ、全員で押しつぶそうと攻撃する

なら、全員撃破してやるまでだ。そんな奴らに、僕は絶対に負けない。

そして、僕がハーフであることも関係していくる。僕は、父はブリタニア人、母は日本人のハーフだ。純血派はそんな僕を排除したいと思っているに違いない。そもそも、僕の証言が聞き入れられなかつたのも、ハーフであることが要因であるのだ。さらに、これも僕がラウンズを騙つていると判断されやすい要因になると思う。

僕に流れる血に関係なく、実力を認めて取り立ててくださった、皇帝陛下には申し訳ないが、でも、僕は救いたいと思つてしまつたのだ。

それに、人ひとり救えないで、国を変えられるとは思わない。
だから僕は行く。彼を助けるために。

「無事に戻つてくるんだよ。そのグロースターだつて、大事な備品なんだから。それに、君も得難いデヴァイサーなんだからね！」

ロイドさんらしいな。それでもありがたい言葉だ。

「もう、ロイドさん！ライ君、無事に戻つてきてね。」「
行つてきます。」

セシルさんの言葉に答えて、僕はグロースターを発進させる。スザクを乗せた車はちょうど中間地点にある橋にさしかかつていった。今から行けば十分、間に合つはずだ。

しかし、結果として僕は間に合わなかつた。

僕は予定地点にはついていた。あとはジエレミア達を待ち受けるだけなのだが・・・。予定外のことが起きてしまつた。

それは、僕より先に、スザク奪還に動く人間が現れたことだ。

STAGE3・仮面のゼロ part2

スザクは沿道の人々から、様々な罵詈雑言を浴びせられていた。全く、ブリタニアも底が知れるというものだ。あいつは無実なんだ。それを今から俺が証明してやる。

そうだ、引き返すべき道は、いらない！

第3ストリートから本線に合流し、クロヴィス皇子の御靈車が護送車両に近づいていく。護送車両は完全に停止し、その接近をなすがままにしている。

そして、御靈車は護送車両の前で完全に停止する。それに合わせて、ジョレミアは、その御靈車に威嚇の言葉を発する。

「出て來い、殿下の御靈車を汚す不届き者が……！」

すると、御靈車の一部が燃え上がり、手品のように仮面をかぶつた人間が現れ、その姿にどよめきが起つた。「わが名はゼロ」

観衆のどよめきは収まらない。その登場があまりにも鮮烈だったからだ。

「もういいだろ？ ゼロ。君のショウタイムはおしまいだ。」

それ以外に何も言葉を発しないその人物に、ジョレミアは業を煮やしたのか、サザーランドで取り囮ませる。その上で、さらにつづけた。

「さあ、まずはその仮面を取つてもらおうか？」

ゼロと名乗る人物は素直にそれに従つかのようなそぶりを見せたが、仮面は外さず手を掲げ、指を鳴らした。

するとどうだろ？ ゼロの乗つた車の後部が割れ、中からカプセルのようなものが現れたではないか。

それは、テロリストに奪取された毒ガスのカプセルだった。

ジョレミア達は驚愕し、ひるんだ様子を見せる。それはゼロが、

観衆にはそれと悟らせずに、観衆をジョレミア達に有効な人質たらしめることに成功したことを意味していた。

ジョレミアは銃でゼロを威嚇するが、そんなものは今のゼロにとって脅威でも何でもない。

あえなく、ジョレミアは銃を下ろし、ゼロの要求を聞いてしまった。

要求は、カプセルとスザクの交換。しかし、そんなものは受け入れられるはずがない。クロヴィスの殺害容疑者を渡すわけにはいかないからだ。

それが真実であったなら、ジョレミアの判断は正しかったのかもしない。

しかし、それは真実ではない。だから、彼は聞くべきではなかつたのだ。ゼロの要求など。

「違うな、間違っているぞ。ジョレミアくん。犯人はそいつじゃない。」

そして、ゼロは決定打となる一言を言い放った。

「クロヴィスを殺したのは、この私だ！！」

さらなるどよめきが起ころ。田の前でしかも、堂々と大胆不敵にクロヴィス殺害を言い放つたのだ。驚かないわけがない。混乱しないわけがない！

「イレブン一匹で尊い多数のブリタニア人の命が救えるんだ。悪くない取引だと思うがな。」

ゼロはさらに堂々、言い放つ。ジョレミアは焦って、ゼロに銃口を向けさせるが、それは愚行でしかなかつた。

「いいのか、公表するぞ、オレンジを・・・。」

ジョレミアの困惑の表情など誰も見ていなかつた。彼らが見ていたのはゼロだけだ。

ゼロは車を近付けながら、なおも、ジョレミアに何か問題があるかのようにふるまつ。

そして、最後に、ゼロはいつも言い放つた。

「私たちを全力で見逃せ、そつちの男もだ。」

その言葉と同時に、ジョンレミアはスザクの解放を指示。部下が困惑するのも構わずに、スザクをゼロに渡してしまった。

観衆は非難「ううう」、まったくもって、正しい反応を示している。

そして、部下たちもそれは同じだった。

しかし、部下の動きより早く、ゼロはカプセルからガスを噴出させ、その場から素早く脱出する。

部下たちが追おうとするのは、ジョンレミア自身が完全に阻止してしまう。

数分後、どうしようもなくなつたかと思われたその時、一機のグロースターが颶爽と現れ、ジョンレミアのサザーランドに突進する。ジョンレミアはライフルで応戦するが、そのことじとくが、幻をすり抜けるかのようにかわされる。

グロースターはライフルを自身のラ nsで弾き飛ばす。

「おのれ！ 貴様何者だ！」

「ライ・ストレイドだ。ジョンレミア！ なぜ、テロリストを追わない！？」

「奴らは、全力で見逃さなくてはならん……」

その言葉と同時にサザーランドはトンファーで突進していくが、神速の槍さばきではじき返す。そこに、スラッシュユハーケンを繰り出し、戦闘不能に追い込む。

「皆さん、妨害はなくなりました。テロリストを追ってください……」

「しかし、ストレイド卿……。」

「責任は私がとる！」

ライの言葉があり、それでようやく動き出すことができたが、しかし、時すでに遅しといったらいつだ。

一つ言えることは、確実にジョンレミアの命運は死きたといふことだ。

「見損ないましたよ。ジョンレミア卿。一時的にですが、あなたを拘

束させてもらいます。」

グロースターのパイロット、ライ・ストレイドの悲しみと怒りに満ちた言葉がコクピットに響く。

「スザク、すまない。君を救えなかつた。」
しかし、その言葉は誰にも届かなかつた。

STAGE 3：仮面のゼロ part 3

僕、枢木スザクと逃げ切ったゼロたちは、廃墟に身を寄せていた。ゼロ自身は僕と二人きりで話し合つために、他の人間を下がらせている。

「そうとう手荒な扱いを受けたようだな。奴らのやり口は解つたらう。枢木一等兵。ブリタニアは腐つていい。」

確かに、そういう一面があることを僕は否定しない。いや、否定できない。

「だから、君が世界を変えたいと思うなら、私の仲間になるべきだ。」

「だが、僕はその意見に賛成できなかつた。僕は知つていたから、僕に優しく接してくれた人たちのことを。だから、知る必要があつた。ゼロが何を考えているのかを・・・。」

僕は言った。

「君がクロヴィス殿下を殺害したのか？」

「これは戦争だ。敵将を討ち取るのに理由がいるか？」

「確かに、戦術的には正しい。」

「毒ガスは？ 民間人を人質にとつて・・・。」

「これは、確かに戦術的には正しいのかもしれない。だけども、人道的には・・・。」

「交渉事にはブラフは付き物、結果的には誰も死んでいない。」

「結果、どうか。そういう考え方で・・・。」

「私のところに来い、ブリタニアはお前の仕える価値のない国だ。僕は笑いだす。おかしくてたまらなかつた。」

「何がおかしい。」

「馬鹿じやねえの。お前。」

「！？」

「ブリタニアに仕える価値がない？ そんなのは、お前が決めること

じゃねえ！俺が決める事だ。それ同時に、お前についていくメリストがどこにあるんだ？俺は頭が悪いんでよく分からんんだ。教えてくれないか？」

俺はその口調を昔のものへと戻していた。この考えが甘い奴は、昔の自分を見るようで、どうしても気に障る。だいたい、人を仲間に誘おうというのに、仮面を外さないのが気に食わない。俺はゼロの言葉を待たずに続ける。

「だいたい、結果がどうとか言ってたが、いつも、てめえの思い通りの結果になるなんて思ってるのか？そんなことは無いぞ。むしろ思い通りに行くことの方が少ないだろ。もし、そうなつたとしても、てめえは、前へ進めるのか？ああ？」

「それは・・・。」

「気押されてるのか？さつきの騒ぎで動じなかつたやつが？くく、ゼロから覚悟はできていなこようだ。なら、どじめとこいつか。」

「無理、限界！お前と話すなんて時間の無駄だ。まあ、お友達の勧誘は間に合つてることであきらめてくれよ。じゃあな。」

俺は、かなりすつきりしながら、ゼロに背を向ける。

「まで、どこへ行く？」

「つるさいな。どこに行こいつと勝手だろ。しつこい奴は嫌われるという格言を知らないのだろうか？」

「軍事法廷だよ。あと一時間くらいで始まるからな。」

ゼロは驚愕したように俺を止める。

「馬鹿か、お前は？あの軍事法廷はお前を犯人に仕立て上げる為のものなんだぞ。」

「こんな、馬鹿な恰好をしている奴に馬鹿呼ばわりされて、再びムカツくる俺。まあ、最初に馬鹿と言ったのは俺だがな。」

「それでも、それがルールだ。俺がいかねと、弾圧が始まる。それじゃあ、寝覚めが悪くてしょづがねえ。それとも、それでいいってこうのか？それじゃ、なおのことだめだ。全然だめだぜ！そりゃ

あ、お前が日本人の為に闘う意思がないってことだろ？そんな奴について戦うくらいなら死んだ方がましだ！」

「馬鹿だ。お前は！」

また馬鹿呼ばわりか、本当に腹の立つ奴だな。まあ、感謝の一つもしどいてやれば、もういい加減でだまるか？

「はー！ とても癪に障るが、お前のおかげで、おそらくは大丈夫だ。頭の切れる上司もいるしな。だから、混乱を起こしてくれたことには礼を言っておく。ありがとよ。まあ、生きて会うことがあつたら、それは戦場だらうから、その時はようしくな。」

そう言って、俺はその場を後にした。ゼロから言葉はかかるない。ようやつと、黙ってくれたようだ。

俺は裁判所への道を堂々と歩いて行った。

STAGE 4・契約 part 1

俺は、落胆し、打ちひしがれながらもようやくクラブハウスに辿り着く。あんなにも拒絶されるなんて考えてもみなかつた。

だが、いいだろう。今後、まだまだチャンスはあるはずだ。スザクを助ける足がかりを作ることができただけでも良しとしよう。

しかし、そんな思いもリビングに入ると、一掃されてしまった。そこにはナナリーのほかに、死んだはずの縁髪の女がいた。無事だつた？ ありえない。こいつは頭を撃ち抜かれたはずだ。

二人は何か言っているが、俺はそれを聞いてはいない。必死に考えていた。何通りもの考えが浮かぶが、そのどれにも確信が持てない。いくつかはオカルトじみてもいる。

「お兄様？ せっかくC・C・さんが来られたのに・・・」

ナナリーの言葉で俺は、思考をいつたん止める。

「C・C・？」

奇妙な名前だ。イニシャルか？ それとも・・・。

ナナリーの言葉に適当に答えながら、思考を展開していくながら、俺は聞き捨てならない言葉を耳にする。

「将来を約束した仲だ。な？」

「は？」

この女はいつたい何を言っているんだ。契約・・・。そういうことなのか？ スザクに拒絶されて苛立つっていたこともあり。俺はC・C・を少しからかいながら探つてやることにする。

「なんだ？ 契約というのは、そういうことでいいのか？ 簡単だな。

「お前が、そうしたいならしてやつてもいいぞ？」

C・C・は、狼狽した顔一つ見せずにこう告げる。つまらないやつだ。

なるほど、これは契約ではないのか。だが、お前は矛盾している。

「そうしたいなら、してもいいって、ひどいな。将来を約束した仲

だろ？俺たちは？」

「私が要求するものとは違うが、契約内容に加えてもいいと言つて
るだけだ。」

すぐさま、矛盾をつぶしてきたか、相当頭が切れるな、この女…
・。そもそも潮時か？

「どうか、とこひでナナリー。実は彼女は『冗談が…』。
「嫌いだ。」

「けど、人をからかうのは好きなんだ。ミレイさんと同じにな。」

「そうなんですか？」

「ごめん、ちょっとからかっただけだから。それじゃあ、…。
ついてきてくれるか？」

俺は…に言葉を告げさせずに、会話を終了させて、彼女の
腕を引っ張つて、リビングを出るのだった。

自室につくと、俺は…をベッドに放り出し。問いただす。

「誰だ、お前は？」

「」の女はふてぶてしく返答する。

「言つてただろ？…と。」

俺はイライラしていた。スザクに拒絶されたばかりでなく、こんな女まで転がりこんで…。あまつさえ、ナナリーは誤解をして
いるかもしれない。

自然と語氣は荒くなつていた。

「そうじやなくて、お前は…。」

「死んだはず、か？気に入つたか？私が与えた力は。」

どうやら、俺にギアスを与えた本人で間違いないようだが…。
「やはり、お前が…。」

「不満か？」

「いや、感謝してるよ。俺のスケジュールを大幅に前倒してくれ
たしな。」

俺は事実を述べた。動き出す時期は分からなかつたが、この力の
おかげで、様々なことを簡単に行えるようになった。たとえば、資

金は貴族に命じて、わからなによつて、俺の口座に振り込ませたりする。

「スケジュール？」

「ブリタニアを壊すスケジュールだよ。」

「壊せると思うのか？その力だけで」

「壊すだけならな・・・それに、この力がなくてもやるつもりだつた。」

その場合は、仲間を集めたりしなくてはいけなくなつていた。だが、この力があれば、そんなものは別になくてもいい。ナナリーの居場所くらい簡単に作れるだろ？

まあ、それはただ壊すだけを目的とした場合だが、それだけではない。

もちろん、ナナリーの居場所を作るのが最優先事項だ。しかし、俺は見返したい。そして、許したくない。救えるはずの母を見殺しにし、目の見えないナナリーと俺を極東に追いやつた皇帝を。そして、その間、のうのうと暮らしてきた兄弟たちを・・・。

「見込み通り、面白い男だな。お前は。」

「ところで、どうする？お前、行くといひなんだろ？それに追われているみたいだし・・・。」

「追われているのは、軍の一部だけだ。普通に隠れていればいい。おもむろに、拘束着を脱ぎだす・・・にびつくりしながらも、俺は目を背ける。

「ここで、いいのか？ちゃんとした客間もあるが・・・。」

「かまわん。男は床で寝ろ。」

「いいのか？一緒の部屋で？」

俺を男として見ていないのだろうか？こんな奇妙な女だが、それはそれでショックだ。

「それと。確認だが、契約とは・・・。」

「お休み、ルルーシュ」

有無を言わざずに、眠りにつく・・・。経験則として、いつも

「手合いには、何を言つても無駄だ。ミレイさんと同じで……。
まあ、命の恩人でもあるから、扱いは丁重にしてやるとするか。資金なら無駄にあるし。

それにもしても、着替えとか必要だよな。女の子の服か……、咲世子さんにでも相談しよう。俺は拘束衣を脱ぎながら、そう思つた。

STAGE 4・契約 part 2

「福島、高知、広島」

セシルさんが言つているのは、ゼロに続けと蜂起事件が起こった地域だ。もう、七件も被害が報告されている。

そのため、僕は学園には行けずに、仕事に忙殺されていた。まあ、自分でも勉強はしているが、テストの自信はない。特に歴史。論述式で意外とマニアックな問題が出てくるのだ。

「まったく、ライ君。君も大変だね。ジェレミア卿があんなことになってしまったって、いい迷惑なんじやない？僕もいい迷惑だけどね。研究が進められないし。」

ロイドさんに言われて、僕もため息をつく。その意見には全面的に同意だ。皇帝陛下からラウンズとして統治せよと、じき拝命を受けたので、軍内部だけには、僕がラウンズだと知れている。樂は樂なのだが、コーネリア殿下にいい形で引き継ぎを行わなければならぬいプレッシャーから、気がまったく抜けやしない。

そして、僕の身分を隠すために、一般人には、ロイドさんが統治していることになつている。ロイドさんはこれでも伯爵で、ジェレミア卿より地位は上だ。

「はあ、まったく、ジェレミア卿には失望させられましたよ。」

「でも、ライ君が調べた時には何も出なかつたんでしょう？」

セシルさんは違和感があるのか、それとも、ジェレミアを憐れんでいるのか、彼を弁護するかのような口調だ。

「僕が見つけられなかつただけですよ。その存在を否定することはできない。」

「悪魔の証明だね。」

さすが、ロイドさんは物知りだ。そう、僕の知らない証拠Xが存在しないことを証明するのは不可能なのだ。

「ですけど……。」

「じゃあ、ジョンニア卿の異常な行動はどう説明するんです? ゼロが魔法か超能力でも使ったと言つんですか?」

まあ、その魔法か超能力が存在しないことを証明するのも不可能ではある。

しかし、その存在を証明しない限り、とりあえずはそんなものはないと受けとられてしまつだろ。現段階では……。

そして、ジョンニア卿は左遷されるかもしれない。……もう一度調べてみるか。

「確かに、荒唐無稽ではありますけど……。」

「わかりました。もう一度調べてみますよ。」

僕が言うと、セシルさんも納得してくれたようだ。ふと、時計を見る。もう少しで、スザクが外に出てくるはずだ。僕らの証言が聞き届けられることになり、今日釈放されるのだ。

「それじゃあ、スザクを迎えに行つてきます。」

そう言つて、僕は裁判所に向かつた。

裁判所から出てきたスザクと歩きながら話していくと、ゼロとの会話を聞き、僕は愕然とし、そして、笑つた。よくもまあ、敵のど真ん中でそんなことが言えたものだ。ゼロもさぞビックリしたことだろ。

「ライ、そんなに、笑わないでくれないか? あの時は、僕もフリーストレーナーがたまつててさ・・・。」

苦笑いをしながら、そんなこと言つてくるスザクに謝りつつ。無事に裁判が終わつてよかつたと喜びながら話つと、スザクも礼を言つてくる。

「君、僕なんかのために無茶をしたらしいね。」

「僕なんかつて・・・、そういう言い方はよくないと思つた。」

「あ、そうだね。ごめん。」

「それに、お礼を言われる筋合いなんてない。僕は一個人の感情で動いてしまつたからな。軍人失格さ。それに、おいしこころは、

ゼロに持つていかれたからね。」「

「それでも、ありがとう。」

僕は自嘲気味に言つたのだが、それにも素直に礼を言つてくるスザク。ああ、本当にいい奴だね。君は。

「ああ、どういたしまして。」

二人とも、どちらともなく笑つていた。なにがおかしいのかもわからないが、こんなに心から笑えたのは久しぶりのような気がした。今回の事件でいやなこともあつたけど、それでも、こんなに笑えたのだから、いいのではないだろうか。

そして、笑う門には福来るとはよく言つたものだが・・・。

「どいてください！」

空から女の子が降つてきて、それをスザクがキャッチした。何だ？ この状況は？ といふか、あなたが何でここにいるんですか

？ ユーフェミア様！

「ごめんなさい。下に人がいるとは思わなくて・・・。」

相変わらずですね。キヤッチしていなかつたら、たぶん、大怪我しますよ？

「僕も、上から女人が落ちてくるとは思いませんでしたから。」
スザクも天然で返している。眞面目に答えるところではないと思うぞ？

「あの、ユフィ。なんでここにいるの？」

僕は一番の疑問を解消するために、ユーフェミア様に聞いてみる。しかし、その言葉に反応したのはスザクだった。

「ん？ 知り合いなのかい？」

「ああ、幼馴染というか、古馴染というか・・・。」

「あら、ライ。久しぶりね。」

「こちらこそ、お久しぶりです。つて、気づいて飛び降りたんじゃないの？」

「全然。」

何だろう、本当に懐かしき涙が出てくる。とにかく、さつき

の質問だ。まだ、学生のはずのコフイが何でいるんだ？」

「ところで、さつきの質問だけど……。」

「そんなことより、私、悪い人に追われてるの、一緒に逃げてくれませんか？」

そんな、まぶしい笑顔で言わぬでください。断れないから。

STAGE 4・契約 part 3

公園近くまで来て、ユフィイはスザクに話しかける。

「自己紹介がまだでしたね。私はユフィイ。ライの幼馴染です。」

ユフィイは僕と同じで、身分を隠したいらしい。スザクを見極めにでも来たのだろうか？それとも興味本位か？

「僕は・・・」

スザクがサングラスを取るうとするのを止めて、自らスザク自身のことを話すユフィイ。

「だめよ。貴方は有名人なんだから。榎木玄武首相の息子さん。榎木スザク一等兵。」

スザクは急に冷めた態度になる。そして、僕に目線を向ける。「すまない。僕もそれは知ってるよ。君が日本最後の首相、榎木玄武の息子だってことはね。」

スザクはため息をついて、ユフィイの方を向くが、そこにユフィイの姿はない。彼女は猫と戯れていた。僕はフォローを入れておく。「まあ、彼女は、なんと言うか自由な人だから、その、あんまり気にしない方がいいと思うんだ。」

「そうなのかい？でも、いい人そうだよね。彼女。」

まあ、ユフィイを見て、何か企んでいるようには思わないだろう。実際何も企んでないし。

「猫好きな人に、悪い人はいないよ。」

スザクの言葉に僕は納得する。ああ、そういうことか、それには全面的に賛成しよう。

僕らはユフィイに近づく、それに気づいたユフィイは猫を抱きかかえて、こちらに近づいてくる。

そして、スザクが猫に指を近づけた瞬間。

「うつ」

スザクは猫にかまれていた。痛そうだ。

猫はけがをしていたので、その手当でも兼ねて、段差に座り、しばらく会話をしていたが。猫がどこかへ行ってしまったのを切っ掛けに、スザクが問いただす。

「なぜ？ あんな嘘を？」

確かに、『案内してください』で済みそうだよな。

「私のこと気になりますか？」

コフィイ、それ答えになつてないよ。確かに、気にならなければ、質問はしないけどさ。

コフィイは無邪気にスザクと僕の手を引っ張る。そして、断れなくなるような、まぶしい笑顔でこう言つた。

「それじゃあ、もう少しあと私に付き合つてくださいな。もちろんライもね。」

僕とスザクは甘いのだろうか。それに何も言わずに付き合つてにする。

まあ、そのおかげで、必要な情報は手に入れることができた。コフィイは学生をやめてしまつたらしい。言葉には出せなかつたが、おそらくは副総督として、姉のローネリア殿を助けることにしたのだひつ。

だから、今日はエリアーチがどんな所なのか見極めに来たといふ、自由に行動できなくて、脱走したのだ。まあ、言い方は悪いけど、そんなところだろう。

で、偶然にも僕らに出会つたと……こんなことが知れたら、ローネリア殿下に怒られそうだな。主に僕が……まあ、コフィイとスザクは楽しんだから、それくらいは我慢しよう。

しばらくして、ほぼ租界を見て回つたころ、コフィイは危険なお願いをしてきた。

「スザクさん。ライ。もう一か所だけ案内してくれないでしょ？ ？」

スザクはふざけて、何なりとお申し付け下さいとか言つてゐるけど、

ユフィはおそらくこれが一番見たかったものなのだろう。その言葉は真剣だ。

「では、新宿に、私に新宿を見せて下さい。」

スザクは驚いていたが、僕は予想の範疇だった。だから、僕は真剣な顔で、こう切り返す。

「あそこは、危険な場所です。そこに踏み込む覚悟があるのなら、お願いではなく、命じて下さい。我々に護衛せよと。」

今度はユフィが驚く番だった。しかし、彼女はこれからそういう立場になるのだ。それ相応の覚悟がなければ務まらないと知つていただかなくてはならない。そう、部下を危険にさらす覚悟を・・・。

ユフィは深呼吸をして、こう告げた。その顔に迷いはなかった。「では、ライ、スザクに命じます。私を護衛しながら、新宿ゲットーを案内して下さい。」

「イエス、ユア・ハイネス。」

僕につられて、スザクもそれに倣う。あとで、真相を話しておかなくちゃな。僕の身分も含めて・・・。

STAGE 4・契約 part 4

「ルルーシュくん。ちょっとといいかしら?」

学園のベンチにて、スザクがどうなったのかネットで調べていると。カレンに話かけられた。疑惑は払つておいたはずだが・・・。

「なんだい?」

「この前の電話のことなんだけど、ほら、バスルームの。」

「ああ。それで?」

やはり疑惑は取り扱われていないのか?それでも、冷静に眉毛一つ動かさずに、俺は対応する。

「着信履歴とかわかるかな?連絡を取りたいんだけど・・・。」

俺はほつとする。ただ連絡が取りたいだけのようだ。

「いや、学校のだから、ちょっと、わからないな。」

そう言つて、ふと顔をあげると、彼の後ろの方にみだりの髪の女が俺の服を着て、くるくる回っていた。

「ごめん。それについては調べておくよ。」

パソコンを持って、俺はC.C.に近づく。

「すいません。見学者の方ですか?」

「は? お前は何を言つて・・・。」

「そうですか。じゃあ、事務室に行きましょう。入校書にサインをお願いしたいんで・・・。」

俺はそう言いながら、C.C.を人気のないところへとひっぱつて行く。

そうして、落ち着ける場所に来ると、C.C.が先に話しかけてきた。それも妙に色っぽくだ。

「こんなところに連れてきて、何をするつもりだ?」

「忠告をしたいだけだよ。他意はない。」

俺は静かに告げる。

「昨日は言ひ忘れたが、この学校には、軍関係者も在籍している。」

今日は来ていかないからいいが、今後は注意した方がいい。」「

「ほう、私の心配か。優しいのだな。」

「いや、優しくないよ。俺は君の行動をとがめるつもりはない、君がどうなろうと、知つたこっちゃない。君は不死身みたいだし。ただ、友達流に言えば、・・・寝覚めが悪いから。それだけだ。」

俺は言葉に感情を込めないようにしながら、忠告を終わる。これは事実だ。一応、恩人ではあるのだから、俺に非がなくとも、簡単につかまられるのはいやだ。

「そうか、やはり、優しい奴だな。おまえ。」

「そうだな。そういうキャラで通してるつもりだよ。・・・それから、今度、君用の制服が届くことになっている。今度出歩くときは制服を着て行つてくれ。」

しばしの無言。Ｃ・Ｃ・は何か言いたげに、俺の顔を見ている。まあ、女子高生の制服を取り寄せるなんて普通の男ならしないからな。

「・・・その格好だと、浮いてるからな。」

そう言って、俺はその場を後にした。

STAGE 4・契約 part 5（前書き）

内ゲバとは、内ゲバルトの略で、組織内部での暴力を伴う対立・抗争です。

STAGE 4・契約 part 5

新宿ゲットーに着くと、その惨状を改めて確認することになった。あちらこちらに墓標がたてられ、半ば集合墓地になってしまっている。僕は、半身が焼かれるような感覚に襲われる。半分は日本人だからだろう。

やはり、毒ガスを奪還するためとはいえ、クロヴィス皇子はやり過ぎたのだ。僕が言えた義理ではないかも知れないが・・・。
「新宿ゲットーはもう、お終いです。やっと人が戻り始めていたんですね。」

スザクは僕の言いたいことを淡々と語つてくれた。それは、同時に耳の痛い話でもあった。

沈黙が流れる。誰も口を開こうとはしなかった。いや、開くことはできなかつた。

その沈黙を破つたのは、興味本位で戦闘の爪痕を撮影していた、ブリタニアの学生たちの声だつた。制服から察するに、アッシュフード学園の生徒だ。

まったく、同じ学園にあんなやつらいるなんて信じられないな。ここで、たくさんの人間が死んだことを理解していいのだろうか。いや、彼らにとつて、日本人は家畜同然だったな。・・・虫唾が走る。

「出て行けよ！ブリタニアの豚ども！」

その学生たちにいちゃもんをつける三人の日本人が現れたことで、事態は一変する。正直、あいつらがどうなると、知ったことではないが、これもお仕事だ。僕が走ろうとすると、スザクがそれを制止して、一人で止めに入る。

「やめて下さい。暴力は！」

スザクが駆けつけ、声をかけるが日本人の一人が手ではねのける。スザクは避けたが、サングラスにかすり、落ちる。

「お前、枢木スザク……」

その言葉で、どよめきが走る。そして、そのどよめきを、最初に突つかかっていった日本人が嫌みたっぷりにさえぎる。

「こいつは奴隸だよ。なにが、名誉ブリタニア人だよ。嬉しそうにしゃがつて、仲間もプライドも捨てて、それでも日本人か！」

この日本人の言う通り、大多数のブリタニア人は、奴隸という認識なのだろう。少なくとも僕は違うと思うが……。

「……確かにその通りだ。でも！」

「何が『でも』だ！ブリタニアの犬があああああ

スザクの言葉に反応して日本人の男が飛びかかるが、スザクはそれをきれいに投げてしまう。まあ、軍人相手に素人じや勝てるわけがない。

男は立ち上がると、一言二言、言葉を浴びせかけるが、仲間の人に言われて、捨て台詞とともに去つていった。

「スザク、大丈夫ですか？」

ユフイが簡単に言葉をかけたのに対し、僕は発言することができなかつた。僕は、自分自身を信じられなかつたのだ。僕自身、スザクを奴隸であるかのような目で見ていないと言い切れないのだ。

「大丈夫じゃないよ。僕のカメラが……どうして殺らなかつたんだよ！名譽のくせして！だれに養つてもらつてるのは、わかつて……」

学生の言葉に、僕より先にユフイが反応する。彼女は学生をビンタしていた。

「この方を侮辱することは私が許しません。」

「なんだと？この……」

「はい、ストップ。」

ユフイに危険が及ぶといけないので、迷いはいつたん忘れて、止めに入る。

「なんだよ。あんた……」

「ここにちは。生徒会の会計係兼風紀係、ライ・ストレイドです。」

僕は邪悪な笑顔で彼らに話かける。彼らはおびえていた。まあ、学園に所属しておくるのもやっぱり悪くないな。

「君たちの所属を教えていただけますか？予算を編成し直しますので。」

「なんでだよ。俺たちがなにし……。」

「まあ、先に手を出したのは僕の友人です。それは謝りましょう。すみません。ですが、あなたたちは、守られておきながら、僕の友人を侮辱しました。それだけで理由は十分だと思いますが？」

「公爵の息子だからって……。」

「別に、その権威を振りかざすつもりはありません。すがるつもりもありません。ですから、知っているとは思いますが、僕は職業軍人をやっています。といったところで、聞いてみましょう。あなたは、一体、誰に、養つてもらってるんですか？」

僕は学費から何やら自分で捻出している身だ。それに比べて、こいつらは親に捻出してもらっているはずだ。そのカメラだって、自分で買ったものではあるまい。

まあ、だからこそ大事にするのかもしねいが、そこはあえて無視しよう。

学生は何かを言いたげにしているが、なにも口に出すことができない。

「まあ、謝つていただければ、この場は、目をつむります。」

「わかりました。ごめんなさい。」「すみませんでした。」

「はい、いいでしょう。では、一度とこうこうことをしないでください？」

それを聞いて、学生二人はそそくさと退散していった。うまく、煙にまけたようだ。

「すごいですね。完全に言い負かしていましたよ。」
とコフイが言えば、

「ライ、ありがとう。君には助けられてばかりだ。」

スザクもお礼を言ってくる。僕は申し訳ない気分になる。だから、

僕は自嘲してこう告げる。

「違うよ。僕はユフイが危険になるかもしないから動いたんだ。すぐに、あいつらを追い払うこともできたのにだ。だから、お礼なんて言われる立場じゃないし、すぐに言い返すことができたユフイの方がよっぽどすごいよ。」

「それでも、僕を友人と言つてくれたじゃないか。」

「そうです。それと、貴方は自分に自信が持てなくなる時がありますけど、全部杞憂です。もつと自信をもつて下さい。」

即座にスザクとユフイに言われて、やっぱり僕はお礼なんかを言われる立場なんかじゃないと思った。僕の方がお礼を言わなきやいけないんだ。僕の方が二人に助けられたんだ。

「ありがとう。本当にありがとう。」

二人はほつとしたような顔になる。僕は相当思いつめた様子だったのだろう。まだまだ、精進が足りないな。

「ですが、ホントに心無い人たちでしたね。」

「仕方のないことだよ。ブリタニアの国は変わらない限り、認識も変わらない。いや、国は変わつても認識はなかなか変わらないだろうけど・・・。」

ユフイは思い出して、憤慨しているようだが、それは違う。彼らを責めるのも酷な話なのだ。そういう認識をするように教育が施されているのだから・・・。

あんなにひどいのは一部だけれど、潜在意識ではブリタニア人の誰もが思っているに違いない。

僕や、ユフイのようにそれに疑問を持ち、心からわけ隔てなく接することのできる人間の方がこの国では希少なのである。

しかし、それも少しずつではあるが転換期を迎えるだろう。僕がナイト・オブ・ラウンズになつたことによつて・・・でも、まだ足りない。そして、変革に伴う犠牲は・・・。
「だから、それを完全に変えるにはブリタニアという国はあまりにも強大だと思う。」

「強ければ、正しいんだろうか？弱いことは、いけないことなんだ
うつか？」

僕の言葉に、スザクは悲しそうな雰囲気で話し始める。さつきまでスザクとは明らかに違う。僕たちはその言葉に聞き入った。

「十年前あの頃、僕には世界はあまりにも悲しく見えた。」

十年前？ブリタニアの日本侵略のときか・・・。確かに、戦争の惨状を目当たりにしたのなら、子供の目にそれはひどく悲しい光景に映つたに違いない。

「飢餓、病気、汚職、腐敗、差別。戦争とテロリズム。繰り返される憎しみの連鎖。誰かがこの連鎖を断ち切らなくてはならない。」

断片的な言葉だったが、それは戦後の世界を端的に表していた。

「だが、それは理想論だ。」

僕は、自分の意見を口に出す。何事なすにも。今の世界では少なからず犠牲を伴つてしまう。

「もちろん。そうしたものが全て無くせるとは思わないよ。だけど、大切な人を失わなくて済む。せめて、戦争のない世界に・・・。」

「でも、どうすれば・・・。」

コフイも考え込んでいるようだ。そして、僕にもそれに対する解答はない。いや、正解自体が存在しないかもしない。

「僕には、まだわからない。でも、目指すことをやめたら、父さんは無駄死にになってしまう。あの戦争で父さんは、死ななければならなかつた！」

古びた時計を見つめながら、スザクは苦しげに語り終えた。

確かに、榎木玄武が徹底抗戦派の軍部を抑える為に、割腹自殺、つまり、切腹をしたんだつたな。実の親がそんなことになつたんだ。ショックだつたろう。

それに比べて、僕は恵まれているのだつ。やはり、僕の思いはエゴでしかないのだろうか？

いや、さつきも言われたじやないか。自信をもとと、そうだ。エゴだらうと構わない。僕はこの世界を変えてやる。

「スザク・・・」

その言葉と同時に、爆発音が鳴り響いた。煙も上がっている。これからすぐ近くの場所のようだ。

そこに、ちようどいいタイミングで特派のトレーラーがやってくる。なんというか、タイミングが良過ぎだ。つけてきたのか？

「ロイドさん、セシルさん！」

スザクもびっくりしているようだ。しかし、そんなものは関係なしに、二人は矢継ぎ早に告げる。

「早く乗って！」

「純血派の内ゲバなんだよ。とつとと逃げよう。」

純血派の？コーネリア殿下が来る前に、身をきれいにしておくつもりか？コーネリア殿下が来たら、弁護してやるかと思つたのに・・・、やっぱりやめようかな。

「ああ、それと。釈放残念でした。また付き合つてもいいよ。」

ロイドさんらしい、言い回しで、釈放を祝つてゐる。一般人にはわかりにくいだろうけど・・・。

「待つて下さい。」

スザクがそれを呼び止める。何をするつもりだらうか。まさか、ランスロットで止めるつもりか？自分を犯人だとでっちあげた人間たちの抗争を？

それは、お人好しが過ぎるだらう。

「ランスロットの戦闘データを取るチャンスではないでしょうか？」

スザクは思つた以上のお人好しだつた。あれ？ゼロとの会話からは、もつとシビアな人間だと思ったんだけど・・・。て、そんなことはどうでもいい。

僕はスザクをあわてて止める。

「スザク、無茶だ。彼らはこの前のテロリストとは違う。いくら、ランスロットだって、何の武装もなじじゃ・・・。」

「その点は、大丈夫。MVSを装備してゐから。もちろん実験済みだよ。」

ロイドさんのその言葉にて、僕は意氣消沈しながらも、それでも、止める。

「しかし、君が止める必要なんてないだろ？ 君を貶めようとしていた奴らだぞ！」

「それでも、止めなくちゃ。だって、味方同士で戦うなんて、悲しみ過ぎるじゃないか。」

スザクはさびしく笑う。まったく、僕などより、スザクの方がよっぽど騎士の器ではないか。

「・・・わかった。君の言う通りだよ。ロイドさん、準備をお願いします。」

「ありがとう。」

スザクは微笑みながら、ユフィに向き直る。

「ごめん、ユフィ。ここでお別れだ。僕は行かなくちゃならない。ランスロットなら止められるはずだから。」

そして、スザクはランスロットに乗り込み、すぐに発進していった。

「行かなくて、いいのですか？」

「僕には君を守る義務があるからね。スザクは君の正体を知らないけど、僕は知っている。だから、あの命令も僕に対しても有効なはずだろ。」

そう、新宿ゲットーに来る前にユフィが命じたのだ。だから、僕はそれに従わなくてはいけない。

「まあ、ここを離れるわけにはいかないが、トレーラーの近くなら安全だから・・・。」

そう言つて、ユフィの方を見ると、突然ユフィは走り出す。瞬間に、僕は腕を掴んでいた。

「どういうつもりだ？」

僕は凄みを利かせて言つた。

「私の護衛をしなければならないのなら、ついて来てくれるんでしょう？」

確かに、その通りだ。しかし、この状況でいつたいビルへ行くつ
もりなんだ。まさか・・・。

「まさか・・・、危険すぎる。生身の人間が戦闘のさなかに飛び込
むなんて・・・。」

「それでも、あなたが守ってくれるのでしよう?それに、あなたは、
部下を危険にさらす覚悟が必要だと考えてるのだろうけど、私は時
によつては自分自身をも危険にさらすこと必要だと思つる。これ
はチエスじゃないのだから。それくらいは理解していふと思つたの
だけど違うの?」

いつものように、こともなげに話すコフイに対して、僕は絶句し
ていた。彼女は僕が思つてゐる以上に、覚悟を決めていたのだ。

まったく、僕は失念していた。彼女はあのコーネリア殿下の妹な
のだ。生半可な覚悟でこの地に降り立つわけがないじゃないか。

いいだろ? 僕も覚悟を決めよう。ともに、世界を変革するため
に・・・。

「わかりました。では、もう一度、御拝命下さい。」

「はい。ライ・ストレイドに命じます。私を護衛し、戦場へと導き
なさい。」

「イエス、コア・ハイネス。」

今度は、完全にひざまづき、命令を受諾する。これがコフイとの
最初の契約だった。

STAGE 4・契約 part 6

僕とユフィイは、戦いの場に急いだ。ランスロットの介入のおかげだろうか、戦闘は沈静化しつつあるようだ。

そして、コロッセオの様な場所の通路を通り抜けると、ランスロットの後ろ側に出ることができた。

「おやめなさい！」

そうユフィイが言つて、僕らは飛び出しだが、判断が甘かったようだ。敵は爆雷を投げ込んできたのだ。

僕はユフィイを背中にかばい。強化ガラスでできた楯を構える。こんなものでもないよりました。

爆雷が炸裂する瞬間。スザクが僕らに気付いたのか、シールドを展開する。

よし、これなら……。

爆雷が炸裂する。だが、案の定、スザクが展開したシールドの右陰で、そのすべては防がれた。

シールドが消えた瞬間。僕はユフィイに前を譲り、その後ろにつき従う。

「双方とも、剣を納めなさい。」

そう命じながら、ユフィイはさらに前へと進み。双方の中間地点で足を止める。

「わが名において、命じさせていただきます。わたくしは、ブリタニア第三皇女、ユーフェミア・リ・ブリタニアです。この場はわたくしが預かります。下がりなさい！」

うん。態度はそれでいい。ちょっとくらい偉そくなくらいでないと駄目だから。これなら、わざわざ僕が名乗るまでもないだろう。

サザーランドは証明をしながら、次々とひざまずいていった。その光景は実に壯觀だった。

「皇女殿下！」

スザクも慌てて、ランスロットから降りてくる。まあ、当然の反応だな。スザクは知らなかつたのだから。なぜ、軍人なのに知らないのかと言えば、コフィイが学生をしていた為、表舞台に姿を現していなかつたからだ。

まあ、さすがに純血派はその名を名乗るにふさわしく、ちゃんと覚えているようだ。

「知らぬこととは言え、失礼いたしました。」

スザクの態度は、かしこまつたようになつてしまつていて。これが嫌だつたから、コフィイは身分を隠していたのだろう。今、とても寂しそうな顔をしているし。僕も、同じ気持ちだしね。

なので、案内のとき、僕も彼女の身分は隠していた。アンフェアなのでヒントは出してたけど・・・。

「スザク。貴方が父を失つたように、私も兄、クロヴィスとそしてもう一人、このエリアで失いました。」

ルルーシュとナナリーのことだらう。さて、新たな問題だ。この二人が生きていることを僕とスザクは伝えるべきだらうか。まあ、生きているんだから、いざればれてしまうだらうけど・・・。

コフィイはスザクへと向き直り、こうお願いした。

「これ以上、みんなが大切な人を失わなくて済むように、力を貸していただけますか？」

「は。もつたいなきお言葉。」

スザクは、そう言つて、ひざまずく。確かに正しい反応だよ。けど正解ではない。

これは、命令ではなくお願ひだ。つまり、コフィイは君と対等な立場でありたいと願つていて。だから、ひざまずくことなんてない。純血派の前で、皇女殿下と握手しろ。なんていうのも酷なので、そこまでは要求しないけど・・・。

僕がラウンズだと知つたらどうするだらう？

そして、その場はおさまり、僕らは撤収した。

帰りのトレーラーの中で僕がラウンズだと分かると、スザクは予想通り、かしこまってしまった。

「いいよ。スザク。僕らは友人なんだから。」

「それでも、弁えるべき、分というものがあります。」「真面目な上に頑固なスザクは、この考えを曲げないだろ？。それじゃあ、折角の人生を損してしまつ。

「それじゃあ、これは命令。公の場でどうしても無理な時はいいけれども、私的な空間であれば僕とユフィとは友人として接すること、いいね？」

「いや、しかし。」

「命令。」

「イエス・・・。わかつたよ。ライ。」

それでも譲らないスザクに、さらに強固に命令を突き付けて、僕は納得させた。スザクのことを言える立場じゃないな。

「だそうだよ。ユフィ。」

僕が呼びかけるとユフィが現れ、スザクは目を白黒させている。そして、僕の方を向いて、こんなことを言つてきた。

「君つて、結構ひどいね。」

「気づいたか？でも、さつきだって、結構ひどいことしてたと思うぞ。学生にさ。」

「でも、あれはスザクと私を助けるためでしょ？？」

ユフィに面と向かって言われて、僕は目をそらす。僕に全く悪意がないと信じて疑つていないのでう。恥ずかしいからやめてくれ。

「あははは。ライも、ユフィの前じゃ形無しだね。」

「つるさい。スザク。君も見つめられてみる。同じような感覚になるから。」

「そうだね。ユフィは魅力的だしね。」

「あら。ありがとう。スザク。」

なんだ、この天然二人組は？全くもって素直すぎだ。こんなんでいい嘘ばかりではない、この世界を変革できるんだろうか？

「それより、スザク。あなた、学校は？」

「いえ、行つていませんが・・・。」

また、違う話になつてるし・・・。

はあ、僕がしつかりしないと駄目か・・・。

そうして、先行きはとても不安なものだったが、それでも、僕たちは歩きだしたのだった。

ゲットーでの一件から数日後、コーネリア殿下が到着され、僕とユフィは出迎えた。緊張の一瞬だ。コーネリア殿下の姿が現れる僕は頭を下げる。

「面をあげよ。ライ。」

言われたとおりに顔をあげると、そこにはほりしい顔があった。最後に会ったときから全く変わっていないその顔に、僕はほっとした。

「お久しぶりです。」コーネリア殿下。いえ、総督。」

「ああ、クロヴィスの死後、よくまとめてくれていたようだな。感謝するよ。それから、ユーフェミアのわがままに付き合わせてしまつたようだな。重ねて礼を言つ。」

「いえ、私も楽しんでいましたから。」

「そうか。それとユーフェミア。あまり無茶はするな。」

「申し訳ありません。お姉さま。しかし、」

「ここでは、総督と呼べ。ユーフェミア副総督。実の姉妹であればこそ、けじめが必要だ。」

「はい。わかりました。」

さすがは、コーネリア殿下といったところか、いつくしむ声の中にも威厳が漂つている。統治者としては素晴らしい人物だ。しかし、ユフィに對して過保護過ぎるので、国是に忠実すぎるのは問題だが・・・。

殿下は、歓迎会への誘導役に話を振る。僕は、必要ないと言つたのだが、勝手に準備してしまつたのだ。どうなつても知らないぞ。「はい。政庁にて皇女殿下の歓迎の準備が整っていますので・・・。

それに対しても、殿下は銃を向ける。ほり、言わんこつちやない。

「抜けている。呆けている。墮落している。」

その声には、先ほどまでのこつくしみや、優しさはない。

「ゼロは、どうした。帝国臣民の敵、ゼロを捕まえろ！」

厳しい声が、響き渡る。そして、ふたたび、僕に目が向けられた。

非難の目だったが、僕は微笑みながらこう告げる。

「許してあげて下さい。彼らは殿下がお疲れになつていなか心配なのです。」

「ライ。私を誰だと思つてこる。」

その声は低く。僕を明らかに威嚇しているような感じだ。まあ、実際は僕を試しているだけなのだが・・・。

「ええ、理解しております。ですから、捜査報告の準備も整つていますよ。できれば、そつそく始めさせていただきたいのですが・・・。」

「ふふ、悪かったな。やはり、ラウンズの名は伊達ではないか・・・。ようしく頼む。」

「はい。では、ご案内します。」

僕はコーネリア殿下たちを案内して、会議場に歩く。まあ、ゼロの報告もせつだが、それよりも先にせつておかなくてはならないことが山ほどあった。

言つては悪いが、クロヴィス殿下は政治には不向きだったのだ。

STAGE 5・信じじむ心と疑つ心 part 2 (前書き)

キャラ崩壊注意。あと、若干ライ×コー・ネリアになつてますので、了承ください。

「なるほど、確かに納得できるものだが、しかし、超能力の可能性は荒唐無稽に過ぎるのではないか？」

ここまで捜査報告を終え、質問があるか聞くと。ダールトン将軍がいち早く反応した。彼は、コーネリア殿下の側近の一人である。そして、孤兎たちを引き取つて、育てたりもしている仁徳のある人間だ。時に苛烈な面を出すコーネリア殿下を諫められる貴重な人物で、端的に言つてしまえば、常識人ということだ。

そう、セシルさんも言つていたが、常識的に考えれば將軍の言うとおり、こんなものは荒唐無稽な推理にすぎない。

だからこそ、僕は反論する。これは常識に考えていては解決できない事件だと捜査を通して思つたからだ。

「可能性はあると思います。状況からして、超能力があれば説明できることも非常に多い。」

それに、異を唱えたのは、コーネリア殿下の選任騎士、ギルフォード卿だ。彼も殿下に認められるだけの技量と、頭脳を持っている。まあ、人としての器と経験はまだまだ、ダールトン將軍にはかなわないが、それは僕も同じだ。つまり、彼も十分すぎるほどに、有能な人物なのである。

「オレンジの件はどうなのだ。君に見落としがないと言えるのか？」「手厳しいですね。確かに、僕に見落としがないと証明することはできません。」

「こうは言つたが、その反論は予想済みだ。」

「それに、オレンジ疑惑について調べていいくつちこ、もっといろいろな問題も発見してしまいましたし・・・失礼。話がそれましたね。正直に申し上げまして、先ほども言つた通り、僕に見落としがないとは言い切れません。僕も人間ですから。しかし、僕が調べた限りでは、ジェレミア卿は白です。」

「その根拠は？」

今度はコーネリア殿下に問われる。よし、ならばこのカードを切ればいいだろ。「コーネリア殿下は情にもろい部分もある。使えば心象を悪くされるかもしけないけれど……。

「マリアンヌ様を覚えていらっしゃるでしょうか？」

「コーネリア殿下は顔をしかめる。忘れるわけがないだろ。自分の敬愛していた人物なのだから。

僕はさらに続ける。

「あの日。・・・マリアンヌ様がテロリストの襲撃を受けた日です。が。彼はマリアンヌ様の護衛、正確に言えばアリエス宮の警備をしていました。尋問中、彼はこう言つていました。」

僕は、ジェレミア卿の姿を思い出しながら、その言葉を語った。彼は拘束衣に、身を包まれながらも、決然とした態度だった。

『私は敬愛するマリアンヌ様を殺された。その最愛の娘であるナナリー様も大けがを負つた。救えなかつた。唯一、無傷であつたルルーシュ様も心に深い傷を残したに違ひない。そして、私は決意した。この一人だけは守ろうと・・・。しかし、願いもむなしく。そのふたりもまた、エリア11で命を落とされてしまった。そして、今度はクロヴィス殿下まで・・・。純血派を作つたのも、皇族の方々を守るためだ。ブリタニア人以外は皇族に恨みを持つ者も多いのでな。だが、それも、もうおしまいだ。私にはオレンジなど果物以外の何物でもない。しかし、貴官らはそうは思つまい。それに、どうであれ、私がテロリストを逃がしてしまつた事実に変わりはない。どういう処断も謹んで受けようではないか。』

そこまで言つて、僕は言葉を切る。だれも言葉を発しようとはしなかつた。それは、ジェレミアという男に同情したからなのか、それとも、この言葉に心を打たれたからなのか・・・。

その反応を確認し、僕はさらに続ける。

「途中からは涙も流していましたよ。ジェレミア卿は・・・。ここからは僕の意見なのですが、彼は、はた目から見れば、確かに、傲

慢な男です。信用に足るとは思えないでしょ。汚職に手を染めていてもおかしくない様に映るでしょう。しかし、その心は、決意は、騎士そのものです。ですから、僕は彼を信じます。・・・これが証拠です。」

僕はそう言いきつて、着席する。そして、しばらくは沈黙を通して、誰かからの言葉を待つた。こんなものは証拠でも何でもないことは解っている。でも、スザクがそうであるように、コフイがそうであるように、僕も信じようと思つたのだ。

ジョレミア卿と、コーネリア殿下を・・・。人格者であるダーレン将軍を、同じく皇族を守る決意をしているギルフォード卿を・・・。

そして、そのコーネリア殿下が口を開く。言つまでもなく、僕を威圧している。

「その証言と、お前の言葉に偽りはないと誓えるか？」

僕はその言葉に屈せずに、まっすぐ見つめ返して、返答する。「はい。」この命に代えましても。「

殿下は目を閉じて、深くため息をついた。

「わかった。私もお前を信じるとしよう。ジョレミアは白だ。ああ、もちろん、テロリストを逃がしてしまった責はとらせるがな。」「姫さまがおっしゃるのでしたら・・・。」「

「ギルフォードに同じく。」

この三人が同意見となつたことで、ジョレミアの話題は彼が白であることとなつた。僕はため息をつく。手は汗でびっしょりだ。これが一番の難所だったので、あとは楽なものだ。

まあ、気を抜いても駄目だけど・・・。

「しかし、超能力があるとして、それはいったいどのようなものなのだ？」

切り替えの早いギルフォード卿は早速、超能力の詳細について聞いてくる。僕はその説明に移った。

「ここからの話はあくまでも推測にすぎません。そのことを最初に

断わつておきます。それでは、資料5ページをご覧ください。」

資料に書いたのは、次のようなことだ。

- 1・相手を一瞬で催眠状態に陥れ、その行動を操れる。
- 2・具体的に命令を告げることによって、その命令を強制的に遂行させる。

3・その力を使はれた人間は力が働いている間とその前後の記憶を失う。

- 4・使用者は相手の目を直接見なければその力を行使できない。
- 5・メガネ程度の透過度なら直接見たことになる。
- 6・使用者は声を聞かせるだけで、力を行使できる。
- 7・一人に対しても何度も使用できるのかは不明。
- 8・使用可能距離も不明。しかし、その特性上、そんなに長くはない。
- 9・能力の媒体は不明。

「かなり絞り込まれているな。推測にしてはかなり具体的だ。これらの根拠は?」

ダーレットン将軍に問われて、僕はリモコンを操作し、スクリーンを開く。

そこには、ゼロが現れてから的一部始終が納められていた。

「これは、テレビ局から捜査協力の為にダビングしてもらった映像です。」

ある程度進んだところで、僕はいつたん、映像を止める。そこには、ゼロの仮面の一部が開いて、目が覗いてる画像が表示されていた。

た。

「そして、この後です。」

僕は動画を再生する。

『私たちを全力で見逃せ、そっちの男もだ。』

その言葉とともに、ジョレミア卿はスザクを解放し、さらに、ゼロたちが逃げようとするのを、攻撃してまで止めていた。そして、映像は止まった。

明かりをつけながら、僕は説明を続ける。

「ご覧になつていただいたように、この映像と証言から具体的に推察しました。そして、これらを考えると、クロヴィス殿下殺害の状況も簡単に説明できます。ただ、ゼロがブラフを使っているとも考えられますので、これ以上の絞り込みはできませんでしたし、確定的な情報とは言えませんが・・・」

「いや、十分だ。しかし、すまなかつたな。こうして見ると、案外荒唐無稽な話でもないようだ。」

ダーレトン将軍が優秀なのは、常識的でありながらこのような柔軟性も持ち合わせているからなのだろう。僕も見習いたいものだ。

「ところで、ライ。肝心の犯人についてはどうなつてているのだ。」

「コーネリア殿下は核心部分についてくる。そう、超能力があるうとなからうと、犯人を捕まえてしまえばそれでいいのだ。多少強引な論理ではあるが・・・。」

僕は咳払いをして、話を開始する。出来れば話したくはない。死んでしまった人を貶めるのは良心がとがめる。しかし、この場合はしょうがないだろう。

「はい。では、超能力についてはいつたん置くことにします。そうすると、犯人については、三つの可能性が成り立ちます。ですが、前提としてこの犯行はイレブンが行つたものではないと考えて下さい。イレブンがあの包囲を突破できたとは思えません。ブリタニア人が起こしたと考えるべきでしょう。類型は過激な主義者が行つたものである可能性。単純にクロヴィス殿下に恨みを持つ者の可能性。そして、クロヴィス殿下が邪魔になつた者の可能性です。」

そこまで言い終えて、僕が全員の顔を見渡すと、全員が怪訝な顔をしていた。

ギルフォード卿が全員を代表して、その疑問を投げかける。

「一つ目と、二つ目は、理解できる。しかし、三つ目の邪魔になつたとは一体?」

「さきほど、他にも色々と見つかったといいましたが、そのことに

ついてです。・・・ 単刀直入に申し上げて、このHリアーは汚職まみれ。テロが活発なのも、軍の兵器の横流しが横行しているからと言つて差し支えはないでしょ。クロヴィス殿下にそれを気付かれ、邪魔になつた者が暗殺した可能性が出てくるわけです。

「君は、それを放置していたのか？ 君がこのHリアに来たのは確かに今年の四月だつたはずだが？」

ギルフォード卿のお怒りも、もつともだ。騎士たる者、当然に主君を守り、主君が間違つた行動をとれば、それを正すべきなのだろう。

「お怒りは」もつともですが、僕がこのエリアに来たのはもともと専用機の開発のためで、内政改革のためではありません。ですから、このこと自体に気付いたのは、今回の事件があつたからなのです。

「しかし・・・。

「よせ、ギルフォード。確かに、一理ある。それに、クロヴィスが死ぬなどと、考へてもいなかつたのだろう？」

さりなる反論をコーネリア殿下がさえぎる。その言葉は確実に痛いところを突いてくる。弁護されているのか、責められているのか、解つたものではない。

「ええ。ですから、僕にも責任の一端はあると思います。だからこそ・・・。」

「よい。それよりも。犯人はブリタニア人か・・・。」

「ええ、まあ、超能力の件がありますので、一概に確定は出来ませんが・・・。」

「コーネリア殿下はショックなのだろう。それは、そうだ。守るべき臣民に殺されるなどと、彼女は考へもしなかつただろうから。まあ、彼女が殺されるということのイメージ自体が存在していないが・・・。」

「『』苦労だつたな。ライ。あとはこちで進めよう。これよりは從来の任務に戻るがよい。今宵はこれで解散とする。それと、ここでの内容は絶対に公言するな。よいな。」

「イエス、コア・ハイネス。」

そして、その場は解散となつた。ようやくすべてが終わり。ほつとして、背もたれに寄り掛かる僕。そこにダートン将軍が話しかけてきた。

「見ないうちに男ぶりをあげたな。コーネリア殿下に一步も引かないでしゃべるとは、なかなかのものだ。」

僕は苦笑しながら、それに答える。

「いやいや、緊張の連續でしたよ。逃げ出せたらどんなにいいか、何度も思いましたし。」

「そうか。だが、それを感じさせない立派なしゃべりだった。今度、何かおごってやる。それでは、また会おう。」

豪快に笑いながら、将軍は去つていった。うーん、昔からお世話になりっぱなしだから、何か恩返しをしたいところだが、それはまだ無理なようだ。

それにしても、何をおごつてもらひつか？　ああ。その時は、グランストン・ナイツも呼んだ方がいいよな。まあ、全員におごりつつもりで言つてるのかもしれないけど・・・。

そんな不毛なことを思考していると、いつの間にか会議場に残っているのは、僕とコーネリア殿下だけになつていた。

「ん？　なんだ？　退室しないのか？」

先に話しかけてきたのは、殿下だった。僕は先ほどよりは気楽に返答する。

「片づけが残つていますので。他の者に任せるとわけにもいきませんしね。」

「そうか、ならば私も手伝おつ。」

そう言つて、立ち上がるコーネリア殿下。僕はあわてて、立ち上がり、それをなんわりと断りながらも、片づけを開始する。

「そんな、お手を煩わせるわけには・・・。」

「よい。それに、今は一人きりだ。昔のように振る舞え。」

殿下の言葉には威圧感など微塵もない。普通の女性が、少し偉そ
うにふるまう程度の感覚である。僕は困惑しながら苦言を呈する。
「よろしいんですか？ コーフェニア様や、ギルフォード卿に示しが
つかないと思いますが・・・。」

特に、コフイに言つた言葉を考えると、そういうことを言つては
いけないと思う。それに、ギルフォード卿に敵視されそうだし・・・。

ダールトン将軍が入っていないのは、彼が寛大だからだ。

「いいだろう？ 何事にも例外はある。」

「では、お聞きしますが、私的な空間ではコフイとも普通の姉妹と
して？」

「ふふ。わかるだろ？ 皆の前では、あのよつに振る舞うしかない。」

さびしそうな笑みを浮かべながら、僕に応じてくる殿下。まあ、
それならばこちらも遠慮の必要はない。

「わかったよ。コーネリア。」

「ああ、それでよい。・・・ライ。」

いきなり、抱きつかれた。

「コーネリア？ さすがにこれは・・・。」

「・・・だめか？」

泣き顔を向けられて、僕は黙るしかなかつた。

「クロヴィスが死んで、泣きたかったのだが、みんなの前では、泣く
わけにはいかなかつた。・・・一人になつても、泣くことはできな
かつた・・・。でも、ライのかおみて、ほつとして・・・。」

僕は合点がいった。彼女はずっと我慢してきたのだ。いや、我慢
せざる終えなかつたというのが正しいか・・・。

しかし、光榮なことに、僕にだけは戦士として、皇女としての仮面
を取つてありのままの自分をさらけ出すことができたらしい。

僕はコーネリアを抱きしめ返しながら、その頭をなでる。彼女は

くぐもった嗚咽で泣き続けた。

夢をみた。、そこでは皆が笑っていた。ルルーシュもナナリーもスザクもコフイもコーネリアも、カレンもシャーリーもリヴァルもミレイも二ーナも、ジノもアーニャも、そして、僕の妹も、日本人もブリタニア人も関係なく。皆が皆、幸せそうな顔で笑っていた。僕はこれが夢だとすぐにわかった。子供の頃のようにこんな風に笑いあうなんて、今の世界じゃできないから……。

これは、僕の願望なのだろう。だけど、それは絶望的にかなわない願いで……。だから、僕は皆に背を向ける。願いから逃げたくて、背を向ける。現実に逃避するために背を向ける。楽な道を選ぶために、犠牲は出るが確実な道を選ぶために……。

でも、僕は動けなかつた。誰かが、後ろから、抱きしめたから。僕は後ろを振り向く。そこには……。

目が覚めると、そこにはコーネリア殿下の顔があつた。
え？ これはどういう状況だ？ ここは僕の部屋だよな？ ああ、調度品がそุดだから、間違いない。けど、なんでコーネリア様がここに？ え？ まさか……。いや、落ち着け、クールになれ！

そして、冷静になつて思い出す。昨日、あの後、眠れないというコーネリアと僕はチエスをしていた。その内に、小腹がすいて、歓迎用に作った料理とコーネリア用にワインをもらってきて、ここから記憶があいまいだが、ワインを勧められるままに飲んでしまつて……。

その後は覚えていない。だが、服は着ているから大丈夫のはずだ。多分。

時計を見る。時刻は午前二時。警備の者以外は全員寝ているはずだ。

「コーネリア。起きて。コーネリア。」

軽くコーネリアをゆするが、起きない。ちくしょう。かわいい寝顔じゃないか。

僕は、もつと見ていたい衝動に駆られるが、そういうわけにはいかない。就任早々にこんなスキャンダルめいたことが知れたら、ゼロ逮捕どころではない。

「殿下！ ゼロが現れました！」

僕は、大声を出す。この部屋は防音なので大丈夫のはずだ。そして、幸いなことに、殿下はその一言で飛び起きる。

「なに！ どこだ！ どこに現れた！」

その声も僕以上に大声だった。その表情は、はっきり言って、怖かつた。起こさなければ、よかつた。

「おはよございます。殿下。」

僕は殿下を落ち着かせようと冷静に告げる。

「おはようではない。ゼロは！ ゼロは！ ゼロは！」

「落ち着いて下さい。嘘ですから。」

「嘘？」

殿下はぽかんとしている。

「そうです。ゼロは現れていません。」

僕はまじめに切り返す。そして、次の瞬間。僕は宙を舞っていた。なんとか、受け身を取って、衝撃は和らげたが、頬はジンジンしている。はつきり言って、気絶しなかったのは奇跡に近いだろう。「まったく、起こす程度でそのような嘘を申すな。」

「しかし、起こさないともっと大変なことになつていたと思しますよ。」

「なぜだ？」

全く理解できていないコーネリア殿下に、僕はため息をつく。さすがに、ゼロで起こしたのはやけに過ぎたようだ。冷静さを欠いている。

「……、僕の部屋で、それ、僕のベッドなんんですけど……。」

殿下はあたりを見回す。そして、ようやく自分の置かれた状況に

気が付いたようだ。

「す、すまん。確かに、起こしてくれて良かった。」

プライベートの雰囲気に戻ったので、僕は聞いてみることにする。

「コーネリア。昨日のことは覚えてるか?」

「ああ、確か、お前とチエスをしていて、その後、料理とワインを味わって、お前は眠たかったのだろう。そのまま、寝てしまつて、それで・・・、その後は覚えてないな。」

なんで、そこで赤くなるんだ。本当はなにがあつたのか? そうなのか?

僕は問いただす。

なにがあつたのなら、それこそ一大事だ。その、いろいろと・・・。

「はあ、復唱要求。僕が寝た後に、君は僕に何かした。」

「するわけがなかろう。わかつた。白状するよ。その・・・、ライの寝顔が可愛かつたから、横で見たくなつて、一緒に寝転がつて見てたら、私も眠くなつて、それで・・・。」

それで、この顛末らしい。昨日のことは、まだいとして、この人はブリタニアの魔女と恐れられている。コーネリア・リ・ブリタニアなのだろうか?

まあ、僕も人のことなんて言える立場ではないが・・・。

「わかつたよ。じゃあ、人が来ないうちに、自分の部屋に戻つて。」

「ああ、わかつていい。それでは、また今度な・・・。」

そう言って、コーネリアは自分の部屋に戻つていった。本当に、

普通の女性にしか見えないよな・・・。

というか、頭が痛い。ワインを飲み過ぎたのだろうか? 僕は立ち上がると、部屋が散らかっていいなかを確かめる。

当たり前だが、散らかつてはいなかつた。僕はワインの空瓶を処理し、シャワーを浴びようと備え付けの浴室へと向かう。

その時に電話が鳴つた。時刻としては、ちょうど監視の報告が来る時間だ。3コール後、僕は受話器を取る。

「はい、ライ・ストレイドです。」

そして、報告が終了すると、僕は電話を切った。

今日も、学園内だけか・・・まあ、買物はメイドに任せている
ようだし、不自由はないのだろうが・・・。

しかし、おかしい。あの事件以来、ルルーシュは極端に学園内部
だけで生活している。授業にも毎時間出でているようだし・・・。
監視カメラにも彼の外に出る姿は映っていない。いや、超能力を
使えば、どうとでもなるはずだ。

だが、ルルーシュが犯人という確証は得られそうにない。しかし、
状況や、動機から考えて、彼が犯人であれば、きれいにロジックが
組める。

まあ、今後も監視を続けるしかないだろう。そこで、僕は思い出
す。今日から学園に出なくてはいけないのだ。
一日酔いつぽいから休みたいのだが、そういうわけにもいくまい。

「あー、憂鬱だ。」

そういってしながら、僕は浴室へと向かつた。

STAGE 5・信じる心と疑う心 part 4

「おはようー久しぶり、って、元気ないな。どうした?」「リヴァルに陽気に声をかけられて、僕がゆっくりと振り向くと、そんな言葉を投げかけられた。

「ああ、仕事が忙しくてさ・・・。」

「オレンジ事件以来、大変だつたみたいだな。でも、新しい総督が来たから、少しさは楽になるんだろう?」

「ああ、これでようやく、勉強にも精を出せるよ。」

まあ、監視のためだけに来ているわけではない。授業料はきちんと払っているのだ。もとをとらないともつたいない。

「真面目だなー。それより聞いたか? 今日、転入生が来るらしいぞ。」

「僕は驚かなかつた。知っていたのだから仕方ないのだが、リヴァルはつまらなそうだ。」

「驚かないのな。」

「知つてたしな。それと、僕の知り合いだし。」

今度は、リヴァルが驚く番だつた。そして、興味津々に聞いてくる。

「なになに、知り合い? ジャア、貴族のご令嬢とか?」

「まあ、来てからのお楽しみみてことで・・・。」

まあ、転校生からすれば、お楽しみでも何でもないようなものだろう。あんなことがあつた後だ。いくら、僕がいるからといって、周りのみんなはなかなか近寄つては来ないだろう。

「お、先生が来たぜ。」

リヴァルは席に着く。

そして、先生は挨拶を終えた後、転入生を招き入れる。全員がシンとなつた。やはり、こうなつてしまつたか・・・。

彼はそれにもげずに真面目に挨拶をする。

「本日付をもちまして、このアッシュフォード学園に入学することになりました。榎木スザクです。よろしくお願いします。」

「どうだい？学園の感想は？」

休み時間。周りで噂をしているクラスメートをよそに、僕はスザクに話しかける。こんな状況で感想もへつたくれもあつたものではなけれど・・・。

「いいところだね。僕にはもつたいないくらいだよ。」

「卑下しすぎじゃないか？」

僕は気楽にしていいと思うのだが、やはり、スザクはいづらいやうだ。生徒会メンバーでさえ、近づかないとは、本当に噂とは恐ろしいものだと再認識させられる。

「ごめん。ちょっと、出でくるね。」

僕はそれに手を振つて、見送る。スザクが去ると、生徒会メンバーが集まってきた。

「すごいな、ライ。普通、話しかけられないぜ。」

リヴァルはすごく感心しているようだが、別になんのことはないことだ。僕は思わず吹きだしてしまった。

「なにがおかしいんだよ？」

ちょっと怒つたようなリヴァルに弁解しながら答える。

「いや、ごめん。だつて、知り合いだと言つたう？」

「そうかもしれないけど・・・。」

「大丈夫だつて。それに君は、僕も怖いのか？僕がブリタニア人と日本人のハーフだつていうことは、知つてるだろう？」

「それとこれとは、話が別だ。」

話が別か・・・。育つた国は違うが、同じ人間だ。なのに、こんなにも違う態度になる。リヴァルといえど、ブリタニア人の枠からは、外れないようだ。

「別じやないんじやないかな？私は、スザク君が悪い人には見えないよ。それに、誤認逮捕なんでしょう？」

シャーリーの言葉に驚き、そして、感心した。ブリタニア人だろうと、そうでなかろうと、わけ隔てなく接することができる人間が、こんなところにもいたのだ。

認識を変革することは、意外といけるかもしないな。信じる心さえあれば・・・。

「ああ、あんなのは真っ赤な嘘。でたらめだよ。」

僕は、元気よく答えた。疲れは忘れていた。

その裏で、僕は見ないふりをしていた。二ーナはそれでもおびえていたのを・・・。

俺はスザクを屋上で待ちながら思考する。

スザクが学園にきた。しかも、ライと知り合いらしい。無事に釈放されたのはうれしいが、これはどういうことだ？ライと同じく、誰かの回し者か？そんなものはライだけで十分だ。

俺はライがこちらに転入してきた当初から疑いを持つていた。そもそも、彼は学校に来る必要がない。本国のアツシュフォード家からの情報で、一般人にはあまり知られていないが、その頭脳から、飛び級で医大を出していることはわかつている。だから、その父のルドルフ・ストレイド公爵と共に、皇族のお抱えの医師として、安らかに一生を終えることもできるはずだ。

しかし、彼は軍に入り、そして、エリアーにやってきた。
軍に入った理由は、軍医として役に立ちたかった。でいいかもしないが、なぜ、派遣されたのがここなのか。

そして、一番重要なのは、ライが俺を皇族だと知っている点だ。
彼は行儀見習いでアリエス宮に来ており、当時の友人の一人でもある。

それに、ライが来てから、咲世子さんから妙なことも聞いている。
見張られている気配がすると。

やはり、監視なのだろうか？だとすれば、誰の命令で、一体何の為に？そもそも、監視されているとしたら、ここに隠れているのは限界なのではないか？

打開策を講じていたそんな時、俺はこの力を手に入れた。絶対遵守の王の力。ギアス。そして、この力のお陰で、とりあえずは何とかなっている。

しかし、その代償が、あの女とは・・・。最初は我慢していたが、傲岸不遜な態度に俺のストレスはだんだん増していく状態だ。ギアスでおとなしくさせようとしたが、あの女には、ギアスが通

じないらしい。どうしようもない状況だ。

「ふう。」

俺はため息をつく。思考を戻そう。とにかく、ライは監視者で間違いない。ギアスを手に入れて、情報収集した結果だ。

問題は、理由だが・・・。

後ろから足音が聞こえてきたので、いつたん思考は止めて振り返る。やはり、スザクが立っていた。

「七年ぶりに使ったよ。このサイン。」

「屋根裏で話そう。」

昔、俺とスザクで決めた秘密のサイン。ちゃんと覚えていてくれたんだな・・・。

「安心したよ。君が無事で。」

スザクは、本当にほっとした様子で言うのだが、それはこっちのセリフだ。俺がどれだけ心配したのか、わかっているのだろうか？
俺は少し眉根を寄せて、そのことを聞く。

「そつちこそ俺をかばったりしなきや・・・。」

俺は、スザクが後ろから撃たれた光景を思い出した。あの時は、本当に死んだかと思った。「借りを返しただけだよ。七年前の・・・。

事もなげに言つてくるが、あれは、確かに、事実だけ見れば、俺が助けたと言つてもいいだろうが・・・。精神的には俺とナナリーが救われたんだ。

だから、借りでも何でもないし。そんなことぐらいで、命を投げ出せるこいつに少し腹が立つて、俺は顔をこわばらせた。

スザクはそんな俺を見て微笑んでいる。何を考えているのやら・・・。

「あ、あの子は？ほら、カプセルの。」

スザクはあの女の心配もしてやつていいよつだ。さすがに、不死身だから大丈夫。クラブハウスに転がり込んでいるとは言えず、それ相応の表情を作り、無難に返すことにする。

「ああ、戦闘のどさくさで、離れ離れになつて……そっちの方が何か、分かるんじゃないかな？」

その途中で、あの女が、軍に追われていることを思い出し、何か情報が漏れていなかつたとさに聞いた。

これで、スザクがなぜこの学園に来たのかも分かるかもしれない。だが、スザクの返答は俺の望んでいたもののすべてを満たしてはいなかつた。

「いや、親衛隊以外は、なにも知らなかつたみたいで……」

「……がここにきてることには気づかれてはいない。となると、手に入れるべき情報はあと一つ。まあ、この様子じや、それはありえないだろ？」「ライもそこまでは考えていないだろ？が、念のためだ。

「ところで、ライとは、知り合いなのか？親しく、話していたようだけど……」

「ああ。僕は、今、技術部にいるんだけど。その同僚。だから、君の学園での様子も聞かせてもらつたよ。ちゃんと授業に出ないと、留年するよ？」

「そうだな。でも、最近はちゃんと出てるから、安心しろよ。」

「それならいいけど。あ、それと、名前。ルルーシュって呼んでもいいかな？」

俺はそれに返答しながら、思考を開始する。この分だと、スザクも監視者ということはないだろ？

しかし、分からぬ。なぜ、今なのだろ？ スザクは名譽ブリタニア人で、クロヴィスの件があるので、ライ以外とは会話をできないはずだ。

それを理解せずに、学校に行くよつて勧めると……心当たりは、一人しかいない。確かに、彼女なら言い出しかねないな……。

その疑問を口にすると、スザクは俺に予想通りに返答してきた。

「ライ以外にも捜査をきちんとやるよう、取り計らってくれた人

がいてね。その人が『17歳なら学校に行くべきだ』って。

「そうか。よかつたな。」

俺は、そう言いながら、確信する。そんなことを言つのは彼女だけ……。

厄介な相手だ。彼女は時々、俺の思惑を大きく超えた行動をとるからだ。チエスで言う、無駄な一手、だからこそ、最も読みにくいまあ、彼女の相手ではなく、その姉の相手が主だろうから、そんなに気にすることでもないけれど……。

予鈴が鳴り、俺たちは、屋上を後にした。

STAGE 5・信じる心と疑う心 part 6

その日の放課後、僕は政厅でコーネリア殿下と相対していた。僕は無表情、無感情に告げる。

「総督。僕の任務は分かつていますか？それに、外部に出すということは・・・。」

「分かつている。お前の判断も間違つてはいない。しかし、名誉ブリタニア人をパイロットにするのは国是に反する。だから、特派には、出て行つてもらう。ここでなくとも、研究は進められるだろう？」

確かに、研究は進められる。しかし、大幅に遅れが出てしまうはずだ。それに、スザクを起用したくらいで出て行けとは、どうにも了見が狭い。

殿下は国是に忠実だ。だからこそ、この起用は認められないという立場なのだろう。しかし、僕は異を唱える。

「では、僕がナイト・オブ・ラウンズであることも、認められない」と？僕にも、に・・・、失礼。イレブンの血が流れていますが・・・。

「お前は、ブリタニア人だ。」

殿下は淡々と断言する。しかし、僕は納得がいかず、問いただす。「その基準は？」

「ブリタニア人の血が流れていること、ブリタニア国籍であること、ブリタニアに貢献すること。以上だ。」

「殿下。お言葉ですが、名譽ブリタニア人制度を否定するおつもりですか？」

制度が設けられている以上、誰であろうとブリタニア人とみなし、実力さえあれば上に行けなくては、そんなものは形ばかりだと、テロやブリタニアへの反抗が激しくなってしまう。

ましてや、コーネリア殿下のやり方では、なおのこと、飴と鞭を使

い分けなければ、うまくはいかない。」「は、他のヒリアよりも反抗勢力が多いのだから……。

殿下とて、戦争がしたくて、したくて、たまらない訳ではあるまい。戦争は手段であつて、目的ではない。まあ、ナイト・オブ・テン、ブラッドリー卿は目的としている節があるが……。

「そのつもりはない。だが、名誉、ブリタニア人には、名誉、ブリタニア人の分というものがある。」

「そんなものはいはずです。それでは、いずれブリタニアは行き詰ります。」

「違う。そういうことではない。私は、軍に入れるのが嫌なんだよ。ブリタニアはブリタニア人で守るべきだ。同族殺しをさせるのも忍びないしな……。」

その言葉を聞いて、僕は冷静さを少しだけ捨てて、まくしたてる。「僕達が今までやつてきたこと、そして、今からやろうとしていることを棚に上げて、よくそんなことが言えますね。それに、どの企業でも才能の有無に関係なく、彼らは忌避されています。だから、僕たちが門戸を開いてあげないといけないのです？」

殿下は、純血派のように皇族を守りたいからではない。ブリタニアに反旗を翻す可能性を打算的に考慮しているだけだ。

「なぜ、信じられないんです！」「いや、信じようとしないんですか？」「それに、この起用を駄目だというのなら、僕も信用しなくて結構です。でも、あなたはそうではないと言った。なぜですか？」

殿下はため息をつくと、僕の目を見つめてきた。そして……。

「お前を信じるのは……お前が好きだから。ではダメか……。

？」

「……はい？」

思わず僕はキョトンとしてしまった。さつきまでの毒氣を抜かれてしまった。

「これは、どういうことだ。好きということは、好意を寄せているということだ。好意の種類にもよるが、これはどう受け取るべきだ。」「

これは、どういうことだ。好きということは、好意を寄せて

きだらうか？

「嫌か？」

昨日の行動だけを見れば、コフィーとのべたつきから、兄弟のよくな感覺だと思った。しかし、この状況だと、そうではない氣も……。
なんか、頬を赤らめているし。

だが、今話しているのはそんなことではない。

「・・・理由は、それでいいとしましよう。しかし、それなら、僕の人選も信用できるんじゃないですか？」

話がループし始めている。たしかに、こんなものに答えは出るはずもない。互いの意見は平行線をたどり、堂々巡りを繰り返すだけだ。

「先ほども言つたが、お前の判断は信じよう。しかし、私にも譲れないものがある。それに、ずっとそこにいるというわけでもない。作戦にもきちんと参加させるわ。次回はランスロットがあると、ゼロが来ない可能性があるので、参加させられないが・・・。」

「それなら、構いませんが・・・。」

「わかつてくれたか。用件はそれだけか？」

「ええ。時間をとつていただいてありがとうございます。では、失礼します。」

僕は最低限の言葉を言つて、総督執務室を後にした。

政府に行く前、釘をさしておいたので、大丈夫だとは思つたが、念のために、スザクのロッカーの前に行つてみると、スプレーを手にしたその学生が、スザクの体操服に誹謗・中傷の言葉を書いていた。僕は、激怒し、その二人を問い合わせていると、運悪くスザクがやつてきてしまつた。スザクは僕を止めて、二人はそのすきにどこかへ逃げてしまつた。

「何故だ？君は今、怒つていいんだ！」

「でも、仕方のないことじゃないかな。」

「仕方がないだろう。それに、あいつらだつて、また来てしまう

ぞ。」

「大丈夫だよ。ごめんね。気を遣わせて。」

スザクはそう謝つて、服を洗うために去つていった。謝る必要な
んてどこにもないのに・・・。

こちらも黙つているわけにはいかず、その後でミレイさんに相談
したのだが・・・。

「うーん。まあ、何とかしたいけど・・・。逆にひどくなってしま
うかもしないしねえ・・・。」

「現状、打つ手なしだと・・・。」

「そういうことね。とりあえずは様子を見ましょ。」

と軽く言われてしまい・・・。何にも手が出せない自分に苛立つ
ていたところに、今回の特派追い出しと、次回の作戦の内容が発表
された。

作戦内容は、ゼロをおびき出すための、サイタマ・ゲットー壊滅

戦。つまりは虐殺だ。

ゼロを捕まるだけでなく、これはやり過ぎで、しかも、ゼロ
が出てくるとは限らない。それに、あの学生たちを勢いづかせるか
もしれない。反抗も勢いを増すかもしれない。すなわち、あらゆる
面でマイナスだ。

だから、特派の件も含めて、抗議に行つたのだが、なにもできな
かつた。

STAGE 5・信じじる心と疑つ心 part 7

夜になつて特派に戻り、そのことを話すと、ロイドさんはがっくりきたようだ。

「はあ、デビアイサーも機体も最高のものを用意できた。なのに、設備が劣化するんじゃね……。」

「大丈夫ですよ。それなりにいいところは見つけてありますから。」

「そう言いながら、場所の地図を渡してきた。」

「しかしね。セシル君。そんなに、明るくはないなれど。だいたい、外部に漏れないように、研究をするのは思つてているよりずっと、大変だと思つよ?」

「えつと、それは……。」

明るく喋つていたセシルさんに現実の話をぶつけるロイドさん。セシルさんは悪いが僕もロイドさんの言つ通りだと思つ。

「ロイドさんの言つ通りですよ。新兵器開発なんて、テロリストが食いつく可能性が高い。そのことを理解してないんでしょ? うかね。総督は。」

「全くだよ。せつかく開発したランスロットを盗まれちゃあ、一生立ち直れないよ。まあ、スザク君と君以外では動かせないだらうけどね。ふふふふ……。」

不気味な笑い声をあげながら、ロイドさんも僕の意見に、話の方向は少し違つが、同調してくれた。

「まあ、命令ですから、従わないわけにはいきませんからね。引っ越し先でばれなきやいいけど……。」

「でも、大丈夫ですよ。あれだけ堂々とランスロットを運んでいても、ばれなかつたじやないですか。」

ゲットーでの一件を言つているのだろう。セシルさんの言つていることも一理あるが、そういうことではない。

「だつて、スザクと僕が出入りすることになるんですよ? 気をつけ

はしますが、つけられる可能性だって……。セシルさん?」の場所つて……。」

「ええ、アッシュフォード学園の向かいの大学よ。」

「セシルさん。笑顔で言つてる場合じゃないですよ。やつさんの話聞いてました?」

僕は、セシルさんをじと目で見る。

「逆に、分からないと思つんですけど……。」

「ばれるときは、ばれますよ?」

「そうだけじね。ここでいいんじゃないかな?」

「ロイドさんまで…」

「だつて、ここなら、狭いけど、まだ設備はいい方だと思つよ?それに、学園周辺の警備はかなり厳重だからね。」

その通りだが、抜け道があるから怖い。たとえば、地下の水道設備などだ。

「まあ、いいんじゃない? 責任は総督に取つてもうれば……。」「多分。責任とらされるの僕ですよ。」

だからこそ、慎重にならなければならぬ。それに、ゼロであるかもしれない、ルルーシュがいる学園のすぐそばに置くのは、どうも気が引けてしまう。

「大丈夫だよ。」

スザクがやつてきていた。僕は少しだけ目をそらして、問いかける。

「理由は?」

「テロリストに襲われても僕らがいるからね。すぐに駆けつけられるじゃないか。」

「まあ、それはそうだが……。」

「大丈夫だよ。それに、学園の近くなんだろ?」「地図を取りながら、再度疑問を投げかけてくる。

「……なるほどな。」

そうだ。発想を変えれば、ルルーシュがいるなら、現段階で、学

園付近が襲撃される確率は低い。まあ、彼がゼロだった場合だが、

東京のテログループと連絡を取っているのは明らかだろうから……。

その場合。ここは一番の安全地帯となるだろ？

僕はいかにも参りましたという感じで手を挙げる。

「はあ、わかりました。賛成多数で、その場所に決定ということです。

「じゃあ、その旨を連絡してきますね。」

「僕らは、機器のまとめ作業に入るよ。」

セシルさんがかけていくと、僕らは僕らで、引越しのための準備を始めた。

引越しの準備が終了し、政庁の休憩ブースで僕はスザクと話すことにした。

「どうだった。ナナリーとは久しぶりに会ったんだろ？」

スザクは懐かしそうに、そして、楽しげな顔でしゃべりだした。

「うん。無事で何よりだったよ。それに、変わつて無かつたな。もちろん体つきは違つてたけどね。」

そして、スザクが食事のことなどを話し終えた後、僕もそれに柔和な笑顔で答える。

「そうか。それは良かった。」

これは、素直にそう思った。ルルーシュがゼロであつたとしても、彼女には何の落ち度もないのだから……。

「それで、本当なのかい？」

スザクは真剣な表情になる。嘘だと言つたら、殴られてしまうかもしれないな……。確証は得られてはいないけど……。

「ああ。ルルーシュがゼロである可能性は高い。」

「まだ、信じられないよ。ルルーシュも昔のままに見えた。」

「だからこそだよ。新宿ゲットーでの件、君を救いだした件。そして……。」

「動機……。」

スザクは悲しそうな顔になる。複雑な感情になるのも確かだ。理解できる。すべては、状況証拠のみに頼った推理。不確定要素も多い。ルルーシュを疑うのは、スザクにとって、苦痛だろう。

「すまない、スザク。ゼロが、ルルーシュで、日本解放を建前として、ブリタニアへの復讐を成そうとしている可能性がある以上、僕らは疑つてかかるって、そして、そうだとしたら、止めなくちゃならない。」

ルルーシュや、日本人は前大戦で日本が負けたのは、枢木玄武首相の自殺とブリタニア軍のナイトメアフレームの存在が大きいと考えているが、これは大きな間違いだ。

当時のブリタニア軍で、ナイトメアフレームは試験的に投入されたものであり、その割合は軍全体の一割にも満たない。作戦のほとんどは、圧倒的な物量による作戦だった。

日本はブリタニアに単純な物量差で負けたというのが、僕の見解だ。

そして、それは今も変わらない。いくら、武力を整えて、ブリタニア軍エリア11方面軍に抵抗したとしても、増援部隊が来てしまえば、それこそ本隊が来たら終わりだ。

そうなれば、日本は今度こそ奴隸としての道を歩むことになってしまつ。変革など出来るはずもない。

ルルーシュが日本を本当に解放してくれるなら、別にかまわないのだが・・・もちろん、ルルーシュがゼロであつた場合の話だ。

「わかつてゐる。それで、僕はこれからどう振る舞えばいいんだい？」
「そうだな・・・つらいだろうけど、しばらくは、疑うそぶりは見せずに、普通に学校に通つてほしい。確証はないからね・・・」

僕は心苦しかつたが、そうお願ひした。

「わかつたよ。大丈夫。気にしちゃダメだ。この世界を変革したいんだろう？」

スザクは僕の心を察してくれたのか、そんな言葉を投げかけてくる。僕は感謝の言葉を返す。

「ありがとう。明日も早いし、戻るつか?」

「そうだね。おやすみ。」

「おやすみ。」

「おやすみ。」

そう言って、僕らはそれぞれの寝室に戻つていった。
僕は、戻りながら、証拠について考えた。そう、もうすぐに得られるはずだ。不本意だが、コーネリア殿下の作戦によつて・・・。

STAGE 5・信じる心と疑う心 part 7 (後書き)

STAGE 5 終了回です。本当は猫に仮面を奪われた騒動も入れたかったのですが、それは番外編として描くことにします。

それにしても、だんだん長くなってきてます。これでも削ってる方なのですが・・・

では、次回をお待ち下さい。

STAGE 6・はずされたチェック part1(前書き)

一応解説すると、チヒスの用語で、チェックは王手、チェックメイトは詰み、リザインは投了・降参の意味です。

STAGE 6・はずされたチェック part1

テレビで報道されていたとおり、コーネリアはゲットーを取り囲み、最初にゲットーの普通の住民たちを処理しながら、じわじわとゲリラをあぶり出そうとしている。

挑発に乗った俺は、そんな光景を見ながら、待っていた。それにしてもひどい光景だった。そして、同じだ。クロヴィスがコーネリアになつてもブリタニアは変わらない。

「どこの所属だ？ 部隊名とIDを示せ。」

後ろの壁を登ってきたザザーランドから声がかかる。丁度いいタイミングだ。俺は、慎重に振り返り、偽りの部隊名と名前を告げ、テロリストからの押収物と称して、中身は何も入っていないディスクを示す。

すると、案の定、パイロットはIDを確認するためにコクピットから出てきた。俺はそのタイミングを逃さずに、ギアスを使用する。「わかりました。しかし、こちらもその前に、あなたのザザーランドを頂きたいのですが？」

俺のギアスは絶対遵守の力。誰も逆らうことはできない。そうやつて、ザザーランドを奪い。新宿ゲットーの時と同じに、コーネリアを討ち取る為に行動を開始する。

この前のイレギュラーは確認できなかつた。あれさえいなければ、俺の戦術で十分対応できるはずだ。

「そう、勝つのは俺だ。コーネリア・リ・ブリタニア！」

味方が撃破され始めた。そして、敵は新宿ゲットーと同じく、こちらのザザーランドを鹵獲して、使用しているらしい。

ライからの報告はあつたが、私はあえて、ダールトンとギルフォードと捜査会議にいた部下以外に超能力のことについては、話していない。ゼロが同じ作戦をとるように仕向けるためだ。

そして、ゼロかは分からぬが、同じ戦術をとつてきた者がいる。

本物か、偽物か・・・。

私は、見極めるために、もうしばらく、成り行きを見守ることにした。

その後も、敵は味方部隊を次々に、鮮やかに撃破していく。調子づいているようだ。

まあ、クロヴィスの件、そして、あのイレブンの奪還の件、この二つを成功させて、調子づくのも分からぬでもないが、今度の相手は、私だぞ？ゼロ。

数分後、補給ルートである橋が落とされたところで、私は全軍にゲットー外縁まで後退を指示した。

さあ、食いついてくるがいい。ゼロよ！

ことは、俺の指示通りに進んだ。やはり、コーネリアは武人であつて、指示を出すだけでなら、俺の方に分があるようだ。
そして、橋を落としたところで、敵は後退を開始する。

「まったく、張り合ひがない。後退する舞台に紛れ込めば、コーネリア。お前のすぐ近くだ。条件は早くもクリアか・・・。」

俺は、何の疑いもなく、後退する舞台上にまぎれて、コーネリアの本陣に近づいた。

全軍が後退しきつたのを、確認して、私はギルフォードら、親衛隊を前線に投入した。すると、急に味方の識別信号を出した機体が市街に現れる。

しかし、そんなものは味方ではない。我が軍に命令を聞けないものなど存在しない。命令を実行できないものなど存在しない。

これは、絶対の信頼。だから、搖るがない。我が軍の結束は、「破壊しろ。」

私は命じる。反論は出たが、それもねじ伏せる。

「私の部下なら、命に代えて、命令を実行するのは当然だ。」

識別信号を出したサザーランドが撃破された。識別信号を無視するというのなら・・・。俺は、素早く指示を飛ばす。

しかし、それはコーネリアに読まれ、失敗する。だが、読み返した分。被害は出でていない！

俺は、次の指示を出そうとするが、応答がない。そして、親衛隊と分かるや、ゲリラの連中は次々に、降伏しようとして、殺されていった。

残された者も、こちらの命令を無視して、戦闘を行い。そして、撃破された。結果として、俺は敗北した。

俺個人の能力が劣っていたこともあるかもしだれないが、それ以上に、組織力の差で俺は敗北してしまった。

「ゲームにすらなつていなぞ！」

戦闘終了を告げるアナウンスを聞きながら、俺は敗北感に打ちひしがれた。しかし、そんな場合ではない。ここは敵のど真ん中だ。

あとは、この中にサザーランドの正規パイロットでない人間がいれば、そいつを捕えて終了だ。

以外にも、あっさりと終わってしまい、拍子抜けして、私はひとりごちる。

「新宿のようにはいかなかつたな。ゼロ。いや、真似をした奴か？」
その間にも、サザーランドの確認は続く。そして、なかなか出でこないパイロットにぶち当たった。

ギルフォードと親衛隊にはグロースターから出ないよう指示してある。ライの報告通り、直接目を見なければならぬなら、超能力は封じられたはずだ。

他のパイロットに使つたとしても、この状況でビツなるものでもない。そして、強行突破もできはしない。

チエスで言う、チェックメイトだ。

さあ、リザインをコールしろ。

そして、ハッチを開こうとしたその瞬間。

「ゼロだ！ゼロを見見！！」

ほう、自分は高みの見物をしていたとか、そして、敗北はしたもの、自分が存在することだけは本陣に現れてまで、アピールするとは・・・。

私の予想通り。まったく、楽しませてくれる！！

ゼロと思しき人物に、コーネリアはただちに射撃を加えるが、ゼロは落下。俺はそれに乗じてその場を脱出した。

STAGE 6・はずされたチェック part2

僕とスザクとカレンとシャーリーは生徒会室にて、猫祭りのための道具の確認をしていた。

「この前、ひと騒動を起こしてくれた猫。アーサーの歓迎会を兼ねた、ミレイ会長発案の気まぐれイベントだ。」

正直、会計作業が大変だったが、アーサーの起こしてくれた騒動で、スザクは学校に溶け込むことができたのだから、そんなに嫌な気はしなかった。

まあ、ささやかな、感謝といったところだろう。

作業が一通り終わつたので、僕らは雑談をしていた。和やかな雰囲気だったが、僕の不用意な一言で、事態は思わぬ方向へと向かうことになった。

「ところで、ナナリーにキスされたとき、どんなだった？」
「どんなって……。」

スザクは困惑しながら、僕の方に顔を向ける。僕は、それに笑顔で答えてやつた。たまには、じつやつて馬鹿話をするのも悪くないはずだ。

「いや、あるだろ？ 柔らかかったとか。」

「確かに、それは否定しないけどさ……。」

顔を真っ赤にして、そっぽを向けるスザク。おもしろい。僕はさらにからかつてやることにする。

「それにもしても、結構必死に追つてたけど、誰か目当ての娘でもいたのかい？」

「違うよ。ミレイさん……。」

「ほう、ミレイさんか。じゃあ、リヴァルと争うこと……。」

「だから、違うって！ だいたい、君だって、必死に探してたと思うけど？」

もううひゅうと、からかおうとしたが、反撃されてしまった。しか

し、甘いぞ、スザク。その言葉では僕に対しての反撃としては弱い。「あれは、学園のレディー達の唇を守つただけだよ。ファーストキスはちゃんと好きな相手とするべきだからね。」

「君つてさ、時々、キザだよね。」

「そうだね。自覚はしてる。」

スザクに苦笑いで言われて、僕も素直に返す。そんなことは百も承知だ。だって、わざとやつてるんだから。

「でも、君がアーサーを捕まえたら、権利はどうあるつもつだつたんだい?」

むう、攻め込んでくるなあ、女性陣一人がいるから、ここは、慎重に答えないと。

「もう、学園には、綺麗な人が多いから、迷つなあ。」

そう言って、カレンとシャーリーの方を窺うと、シャーリーは何やらただならぬ雰囲気だ。

そういうえば、さつきから会話に参加してこないのはなぜだひつ。カレンはこういう話が嫌いなだけかもしけないが、シャーリーは好きそうなのに……。

「どうしたの、二人とも?」

スザクはお構いなしに、質問した。

度胸あるなあ。いや、敵陣でゼロにあれだけの言葉を言い放つたのだから、これくらいは当然にできるか……。

「あのさ、カレン。私たちに何か隠し事してない?いいよ。隠さなくとも……。」

「なんの話?」

カレンは若干の緊張を伴っていた。なにか本当に隠し事でもあるのだろうか。

「話してよ。私、驚かないから……。このあいだね。見ちゃったんだ……。」

場の空気はさらに緊張度を上げていた。僕とスザクも固唾をのんで次の言葉を待っていた。どうも、発言できるような空氣ではない。

「どうか、僕らの存在、忘れてないか？」

「付き合つてるんでしょ。ルルと！」

・・・はい？

僕もスザクもカレンもその一言にキヨトンとなつた。それくらいのことでの、つてまあ、大事件だけど、そんなに重くなるような話でもない。

監視しているから分かるが、付き合つてる事実なんてないのだから。

「だつて、この前校庭で・・・。」

「ただ、話しかけただけよ。」

「アーサーを捕まえようとした時だつて・・・。」

「あれは違うでしょ。それに、キスくらいで・・・。」

「キスくらい・・・。じゃあ、それ以上も・・・。」

「ちょっと、変な想像ストップ！周り見えてなさすぎ！」

シャーリーは顔を青くしながら、逆にカレンは顔を赤くして、焦つているような、怒つているような感じで、受け答えをしていった。

「シャーリーって、あんな性格だつたけ？」

スザクは呆然としながら、僕に聞いてくる。それに僕は、苦笑いで答えた。

「時々、特にルルーシュのことになると、変な妄想をしてしまつりしいんだ。」

「へえ、そうなんだ・・・。」

僕とスザクがそんな会話をしている内に、話は、どんどんヒスカレートしていった。

「嘘をつかないで！」

「嘘なんてついてない。私はルルーシュとつきあつてないから。」

「じゃあ、歓迎会の時は？あの時、告白されそうになつたんでしょう？」

「だから、違うって・・・。」

そう言いかけて、一瞬僕らの顔を見るカレン。僕らを使って、な

にかを仕掛けたのだろうか。

「いい加減にして、カレン。本当のことを言つてよ。」

「わかった。正直に話すわ。私は、ライと付き合つてゐる。」

「え！？」

シャーリーはおろか、スザクもびっくりしたように声を上げる。

そりやそうだ。僕だって初耳だもの。

それでも、僕が動じなかつたのは、ある程度読めていたからな
だが、一番大胆な方法をとつてきたな。僕としては、まんざらでも
ないけど。

「本当なの？」

シャーリーが僕の方を向きながら、聞いてくる。顔は真剣そのも
のだ。僕は、カレンを咎めるような口ぶりで、話を合わせる。

「カレン。秘密だつて言つたじゃないか。」

「仕方ないじゃない。本当のこと言わないと、シャーリーが納得し
そうになかつたし、それに、ルルーシュと変な噂がたつてもいいの
？」

「まあ、いい気分じゃないな。」

カレンも少し怒つたような演技で言つてくる。それに合わせて、
表情を変え、さらに合わせる。

「それに、隠すのも限界があると思うわ。だから、いつそのこと、
言つてしまつた方がいいと思つたのよ。少なくとも生徒会メンバー
にはね。」

「確かにカレンの言う通りだ。嘘をつき続けるのはよくないね。ま
あ、そういう事だから。シャーリー、納得してくれたかな？」

僕は照れた様子を見せながら、シャーリーに聞いてみる。彼女は
首をぶんぶん縦に振つて、謝つてきた。

「『めん。ライ君の前で、あんなこと聞こちやつて…ライ君も氣を
悪くしたよね？本当にごめん！』

僕は、ほつとしながら、シャーリーに言葉をかける。

「別に、気にしてないよ。カレンだってそうだろ？」

「ええ。じつちこそ、ごめんね。隠してて。」

そう言つて、カレンもいつもの感じに戻つた。しかし、少し顔を赤くして、いつもより少しだけ活発に反論していた時の方が、カレンらしいと思つてしまつたのは、なぜだろう？

「すまない。遅れた。用事が長引いちゃつてね。」

「ルルーシュでも苦戦することがあるんだなあ。びっくりしたよ。噂をすれば、何とやら。そこへ、ルルーシュとリヴァルが入ってきた。

リヴァルの口ぶりからして、用事とは、賭けチエスか何かだろう。まあ、びっくりもするだろうな。リヴァルの隣にいるのが、本物のルルーシュだとしたらだが……。

「もう、また賭けチエス？」

シャーリーが冷たい視線を向けながら、ルルーシュ（便宜上そう呼ぶ）に話しかける。まあ、彼のせいで、危うく生徒会に亀裂が入るところだったし、この前、やめると言いながら、賭けチエスをしていたのだから、こんな態度をとられても仕方ない。

「いやー、どうしても、断れなくてさあ。」

「そうそう。俺は、もひやめると言つたのに、リヴァルが勝手に受けてしまつたんだよ。」

リヴァルの弁解にルルーシュが補足を入れる。

「リヴァル。会長に報告するわよ。」

今度は、その冷たい視線をリヴァルに向けるシャーリー。

「ごめんつてば。だから、会長には報告しないで……！」

必死に懇願するリヴァル。しようがない、助け船を出すとするか・

・・。

「シャーリー、そのくらいにしておこう。その代わり、リヴァルには後の準備をやらせるつてことで。」

「えー！あと、飾り付けだけじゃない。」

「いいじゃないか。多分、リヴァルだって、貴族相手じや断れなかつたんじゃないかな？」

「そりそり。ライの言つ通りなんだよ。」

助け船は出したが、シャーリーはなおも不満げな顔をしていた。
むづ、一体どうしたものか。僕は、スザクに顔を向けるが、肩をすくめて見せるだけだった。

まあ、この状況で手を打てるのは、ルルーシュだらう。そして、実際にルルーシュが手を打った。

「そうだな。これで、最後にする意味合にも兼ねて、今回の勝ったお金で何かおこるよ。もちろん全員に。」

「えー！ だつて、結構な額だぜ！ ？」

どれくらい、儲けたのだろうか。でも、シャーリーは納得しないと思うや。

「賭けで儲けたお金でおこつても、嬉しくなんてありません。」

「ん。

当然のように、シャーリーは逆に怒つてしまつた。

「じゃあ、寄付すれば？」

そこには割つて入つたのは、スザクだつた。どれくらいを寄付に回せせるつもりなのだろう。

「あ、それいい考え！」

この考えには、シャーリーも賛同したようだ。まあ、足を洗うという意味では、こちらの方が正しい使い方だと思つ。
寄付された方からすれば、結局は賭けで稼いだお金だけ……。
いや、寄付される側はそんなこと考えないか。

「まあ、仕方ないな。」

「えー！ ？ せつかく、稼いだのに？」

「なあ、リヴァル。会長に報告されると、寄付するのどっちが楽だ？」

「……寄付する方が楽です。」

最後まで、しぶつていたリヴァルだが、結局は折れる形となつた。
飾りつけは結局全員でやることになり、それが終わると、それぞれ帰つていつた。

STAGE 6・はずされたチェック part3

とりあえず、僕はカレンを家まで送ることになった。まあ、怪しまれないためにだ。

「ところで、カレン。あんなことを言って大丈夫なのかい？」
道すがら、僕はカレンに確認を取つた。別に、僕はかまわないのだが・・・。

「ええ、大丈夫。それに、あの状況でスザク振つても、あわせてく
れなかつたと思うけどね。」

すまし顔で、カレンは言つた。確かに、スザクに振つたら、まじ
めに返してしまつて、ごまかすことなどできないだろう。

「僕が合わせないとは、考えなかつたの？」

「あなた言つてたじやない？ 猫探しのときに必死になつてたのは、
レディーの層を守るためだつて。」

ちゃんと聞いてたのか。なんか恥ずかしいな・・・。

「だから、レディーの名誉も守つてくれるんじやないかつて、思つ
たのよ。」

まるでルルーシュと付き合つたら、不名誉だといつているような言
葉に、僕は苦笑しながらも、彼を弁護した。

「ルルーシュがそんなにいやか？ ルックスはかなりいいと思つんだ
けど。」

「失礼だけど。見た目だけだと思うわ。」

カレンは、ぱつさりと切り捨てた。ルルーシュは何にも感じない
のだろうが、ルルーシュのファンに言つたら、きれられそうだ。

それに、ほかにいいところもたくさんある。家事とかできるし・・・。

僕は、一応忠告しておくことにする。

「カレン。女性陣の前では、言わないほうがいいぞ。」

「ええ。わかってる。あ、遅くなつたけどありがとう。話を合わせ

てくれて。それと、あなたのほうこそ、大丈夫なの？」「僕はかまわないよ。気にしないで。」

カレンは思い出したように、不安げな表情で僕のほうを伺つてきたが、僕はそれに微笑みながら、返答する。

「そう、それならいいわ。」

「ただけど、それが？」

「私もね。ハーフなの。ブリタニアと日本の・・・。」

ほつとした様子のカレンから、突然に大変な秘密を告げられて、僕は足を止める。

「え？」

「だから、私もハーフなのよ。・・・驚いた？」

確かに、驚いた。ブリタニアで、ハーフである人間はそれを隠すものだ。いらぬ争いや、差別を避けるために・・・。

堂々と公言している僕は、例外だ。

「なぜ、僕にそんな重要なことを？」

「フェアじゃないでしょ。助けてもらつておいて、感謝の言葉一つだなんて・・・。」

「だから、気にしなくてもいいって・・・。」

「そつちこそ、気にしなくていいわ。だって、私の勝手で言つたんだから。」

すがすがしい笑顔で言われて、僕は押し黙る。

なんというか、僕は全般的に女性に対して、最後の最後で甘くなるか、強く出れない性質なのだろう。悪いといつわけではないけれど、少し改善した方がいいのかもしれない。

だから、僕も・・・。

「けど、やつぱり、それは対価としては・・・。」

そのとき、前方で人が倒れるのが目に入った。女性のようだ。その子供だろうか、三歳くらいの子が、おろおろしている。今にも泣きだしてしまいそうな感じもする。

だが、周りの人間は、ただそれを避けて通るばかりだ。

僕は、カレンを置いて、走り出す。

「大丈夫。ちょっと、待つってね。」

僕は子供の頭をなでると、女性を仰向けにして、意識を確認する。数回に分けて肩を叩き、段々と大きな声をかける。反応はなし。続いて、呼吸確認。気道を確保し、胸の動き見ながら息を直接感じるために、自分の頬を女性の顔に近づける。呼吸もしていない。さらに、脈も確認する。脈拍なし、つまり、心臓は拍動していない。「ちょっと、いきなり走り出さないでよ。」

カレンが追い付いてきた。僕は、ポケットから携帯電話を取り出し、カレンに投げてよこす。

「119番だ。救急車を呼んでくれ！」

「は、はい！」

カレンはびっくりしたように、携帯を操作し始める。それを見て、僕は心臓マッサージと人工呼吸を開始する。

30回の心臓マッサージの後、2回の人工呼吸。しかし、呼吸は戻らない。僕は再び、心臓マッサージに移行した。

「ありがとうございます。お兄ちゃん。」

「どういたしまして。それじゃあ、お大事に。」

頭を下げる先ほどの女性と、手を振る子供に別れを告げて、僕は病室を出た。女性は、救護措置が早かつたので、大事には至らなかつた。

「それじゃあ、後は頼んだよ。」

病室を出ると、担当の医師が立っていたので、僕は声をかける。

「戻つてくる気は無いのですか？」

「すまない。でも、戻れないよ。」

「そうですか。残念です。」

医師は悲しげに笑つて、その場を立ち去つた。僕は、出口へと向かう。受付の待合所では、カレンがベンチに座つて待つていた。てっきり帰つたと思つたが・・・。

「ごめん。つき合わせてしまって……。」

「いいわ。それより。あなた……。」

「ストレイドの名前は有名だろ?」

「だけど……。その年で医師免許なんて……。」

「驚くのも無理はないけど、事実だよ。」

カレンの驚きようは、ハーフだと告げられた僕よりも大きいものだったのだろう。彼女は半ば、呆然としながらの会話だった。

「なんで、軍にいるの?誰でも、わけ隔てなく助けられるはずなのに……。」

「それが無理だから、限界があるから、軍にいるんだよ。」

カレンの言葉に、僕はできるだけ、笑顔になるように顔を作る。だが、きっとどんなにうまく作れたとしても、寂しさは出てしまうだろう。

「さっきも、見ただろう?ブリタニア人はだれ一人として、彼女を救おうとはしなかった。心配して目を向ける人すらない。おそらく、彼女が日本人というそれだけの理由でだ。」

現在のブリタニアでは、緊急救護マニュアルは高校を卒業している程度なら、誰でも知っている。そして、ストレイド家が創設した報奨金の制度もある。だから、一人も心配しないなんてことはない。「それじゃあ、だめなんだ。いくら、僕が力を揮つても、限界がある。さっきは、偶然、助けられたけど……。」

「でも、それは軍にいる理由には……。」

「僕はね。カレン。名誉ブリタニア人になれば、キチンとした仕事につけて、きちんとした生活を送れるようなそんな社会にしたいんだ。そうなれば、時間はかかるだろうけど、差別も自然と無くなるはずだから……。」

「あなたは、軍で功績を上げさせようと言うの?日本人に、同族殺しをさせることになつても!そして、他の国の幸せを奪つても!」

「ああ、正確には、名誉ブリタニア人全部でね。」

「エゴよ。それは!」

カレンは怒っていた。でも、それは仕方のないことだらう。確かに、こんなものはエゴだ。そして、日本人であることを捨てろと言つていいようなものだ。むしろ、素直に賛同してくれたスザクの方が異常なかもしねりない……。

だけど、そうでもしなければ、変えられない。それに、日本の文化までを捨てろと言つていいわけではない。

いや、これも、やはり言い訳だ。

だから、僕はカレンから顔をそむけながら問う。

「それじゃあ、どうすればいい? この世界を変えるには……。」

「戦うのよ。ブリタニアと!」

「戦うか……。」

僕は、その言葉に、落胆する。

ブリタニアが日本を蹂躪し、その名前と権利と誇りを奪つたのは許せないだらう。しかし、そこにこだわつたままでは、ブリタニアに敵意をむき出したままではだめだ。どこかで折り合いをつけなければ……。

いつまでたつても、世界は変わらない。

「そうよ。戦うの。ブリタニアを倒せば、きっと……。」

「カレン。本当に倒せると思うのかい? 倒せば、本当に変わるのがいい?」

「ええ。多分だけど……。」

「駄目だ。全然駄目だ。君は、ブリタニアを、世界を知らなすぎる。・・。」

「なら、あなたにはわかるの!?」

カレンが掴みかかってくる。僕も、それにカレンをまっすぐに見据えて、返答する。

「ああ。僕はナイト・オブ・ラウンズだから。」

言い切つた。カレンは僕をつかんだ手を離し、後ずさる。僕は知っている。平和を作る為には、保ち続ける為には、多くの犠牲が必要なのだと。それでも、みんなが平和を望んでいることを、

平和は尊いものであることを・・・。

「僕は、ストレイド家の長子として、そして、軍人として、世界と
ブリタニアの中核を見てきた。だからこそ、変えられると思つし、
変えたいんだ。世界を、ブリタニアを。」

そして、僕は罪を背負おう、本当の自分を幻影で覆い隠そう。世
界が変わるその日まで・・・。

STAGE 6・はずされたチェック part 4

シユタットフェルト家の迎えに後を任せ、僕が病院を出ると、スザクが待っていた。

「どうしたんだ？」

「しゃべったのかい？」

彼は暗い顔をしながら、そう聞いかけてきた。見られていたのか。
・・。

「ああ。すまない。」

「謝つてすむ、問題じゃない。なぜ、しゃべったんだ！君が狙われて、命を落としたらどうする！？」

スザクは激昂する。僕は、軽めにそれに反応する。

「大丈夫だよ。むしろ、カレンから噂になつた方がいい。ルルーシュが動くだろうからね。それに、僕は、ラウンズだ。そんな簡単には死はないさ。」

「けど！」

「大丈夫だよ。大丈夫だから。」

僕は笑顔を作つて、スザクの肩をたたくと歩き出す。スザクも僕の後ろにつくような、形で歩きだす。

まあ、納得はしてくれないだろう。僕が勝手な事をしたのだから。
・・。

「なあ、スザク。僕らは軍人だ。そして、その前に人間だ。いつ死ぬかなんて、わからない。」

返事はない。僕は振り返らずに、続ける。

「それからさ、僕やユフィイがピンチに陥つたら、君が助けてくれるだろ？」

「買いかぶり過ぎだよ。僕にだつて限界はある。」

「それでも、信じてる。」

僕は振り返る。まだ、スザクは怒つているようだ。でも、スザク

だつて、頑固な時は頑固なのだから、これくらいは許してほしい。

頑固なことと、これは関係ないかもしれないけど……。

「・・・危険なことがあつたら、僕にすぐに言ってくれ。」

「ああ。わかつてゐよ。」

そう言つて、ほほ笑む僕に、スザクは不満の言葉を漏らす。

「・・・君は、卑怯だ。」

その様子に苦笑していると、携帯が鳴つた。スザクに断つて、再び歩き出しながら僕は電話に出る。

「はい、ライ・ストレイドです。」

『アリスです。』

「どうだつた?』

『監視をしていましたが、篠崎咲世子に不審な点は見受けられませんでした。』

予想の範疇だ。ルルーシュがこちらの監視に気付いているなら、なおのこと、普段の様子と変わらないはずだ。

「ゼロは現れたのか?』

『はい。サイタマゲットーに現れたそうです。手口はシンジユクゲットーと同じでした。コーネリア総督が撃退されましたか、逮捕には至つていません。』

「そつか・・・。』

同じ手口だつたとすると、ザザーランドを鹵獲しての作戦か……。

あの状況で、出でいくのは、ルルーシュ以外とは考えにくい。

それに、ルルーシュに超能力があることを前提に考えれば、さつきの状況もどうともなる。あのルルーシュが本物だつたとしても……。

そして、あれが変装した偽物だつたとすれば、もっと簡単なのが……。

篠崎咲世子は協力していないのか?

しかし、超能力があるという、推理に頼るのは危険かもしない。

だとしたら、ルルーシュを容疑者から外さなくてはならない。何の

力もなしに、彼は反逆など考えないだろうから・・・。

しかし、多くの犠牲を払つても、確証が得られないなんて、最悪ではないが、最低の展開だ。

「これじゃあ、全然駄目だ。」

『申し訳ありません！』

「すまない。こっちの話だから。気にしなくて大丈夫だよ。』

僕は、慌てて取り繕つ。電話に出ていたのを忘れて、独り言を言つてしまつたようだ。

「報告ありがとう。』

『はい、失礼します。』

電話を切ると、ため息をつく。そして、こう告げた。

「駄目だった。』

スザクは複雑な表情をした。それは、友人の容疑が少し晴れたことへの嬉しさと、それでも、ゼロが捕まっていないことへの、憂いのようになみとれた。

それを見て、僕は何も言わずに歩いた。スザクも何も言わなかつた。それは、僕らが特派の研究室につくまで続いた。

STAGE 6・はずされたチェック part5（前書き）

またチョス用語なのですが、スタイルメイトは、簡単に言つと引を分けといつ意味です。

STAGE 6・はずされたチェック part5

「これで、スタイルメイトか……。」

俺はぼやく。現時点ではどちらも駒を動かす事が出来ない。盤上を振り出しに戻さなくてはいけないだろう。

まあ、それはライの方も同じだろうが、しかし、コーネリアを捕虜にすることが出来れば、こちらがチェックをかけ返せたものを……。

「ほう、あれは二重の策だったというわけか……。だが、敗北は計算に入つていなかつたようだな。」

「ああ、だから、俺は作り出す。ブリタニアに対抗できる軍隊を、国を！」

C.C.に笑われて、俺はもう一度宣言する。今日の戦いで、決定的な差を思い知らされた。目的のためには、俺のギアスだけでは足りない。

「しかし、一種のギャンブルだったな。人は平等ではないことに異論はないのだろう?」

「ああ。だが、結果的にはうまくいった。それに、望んでいない結果だつたとしても、何とかするつもりだつた。」

「妹の友人にギアスをかけてでもか?」

「・・・ああ。」

確かに、それに躊躇はある。結果として、そなならなかつたのだから、ホッともしている。しかし、そなしなければならないのなら、俺はやるだろう。

「そうか。しかし、アリストとかいう娘が監視だとよく気付いたな。」

「ナナリーに近づいてくる人間は珍しいし、それに、ライが転入してからは、より頻繁に見かけるようになったからな。」

ブリタニアという国は弱者を優遇したり保護したりはしない（最低限、車いす用の道などはある）。国としては本当に平等に扱う。

保護しているのは、少数の貴族と民間企業だけだ。だからこそ、結果として弱者は虐げられてしまう。

それにもかかわらず、車いすで田の見えないナナリーに近づくのは、本当にやさしいか、それとも、俺達の正体を知つていて、利用しようとしている人間だけだ。

後者の方が多いことは言うまでもない。

「それで、どうするんだ？」

「ああ、新宿の時のレジスタンスを使う。あいつらには、助けた恩もあるし、目の前で奇跡を起こしてやったのだから、簡単になびくだろう。」

そして、あの中にはカレンもいる。新宿で、紅いグラスゴーに乗っていたのは彼女だろう。だとしたら、イレギュラーに一瞬でも拮抗したその力、使わない手はない。後は、リーゼントの男。扇とか言つたな、あいつは新宿のグループをまとめていたそつだから、それなりに役に立つだろう。

「あいつらに、ギアスは？」

「使わない。カレンに一度使つてしまつてはいるからな。他の奴に使つて、怪しまれるのも困る。」

「それでいいのか？ 本当に？」

C . C . は鼻で笑いながら聞いてくる。まあ、たしかに、ギアスを使つて、奴隸を作り出してしまえば、簡単だが、人心を掌握するのにギアスは必要ない。

この力は、あくまでも切り札なのだから・・・。

「まあ、見ておけ・・・。」

「おお、そうか。それじゃ、お休みルルーシュ。」

「またお前は他人のベッドで寝るつもりか！？」

「ダメ？」

俺は、C . C . がベッドにもぐりこむのを、掛け布団を引っ張り止める。ところがこいつは、純粋無垢な顔をして聞いてきた。お前には似合っていないぞ、この魔女が！

「お前の部屋は別に用意しただろ？ー。」

「あのベッドは使われてなかつた期間が長かつたのだらう。硬いんだよ。こちりは適度に柔らかい。」

「贅沢を言ひつな。」

「ケチめ。」

「あのなあ。お前の衣食住、世話をしてもうつてゐるのば、誰だと・・・。

「お前がギアスで操つてる貴族だらう？そして、ギアスを与えたのは私。つまるところ、私は自分の力だけで生きている。逆に言えば、お前は私に養われてゐる状態だな。自分の力で生きていなければお前の方だ。」

その言葉に、相当腹が立ち、俺はキレた。いや、キレたのだろうか？分からぬが急に冷めたような感覚になった。

「屁理屈だな。そもそも、お前が脱出できたのはレジスタンスのおかげ、そして、俺がいなければ、お前は再び囚われの身だった。外の空気を吸うことも、ましてや、きちんととした寝床を得るなんてことなどなかつたんぢやないか？なら、お前だって、今の状況に至るのに、運しか使っていない。さらに、俺はこの力などなくとも、金なら稼げる。よって、今の状況は、お前が言つようなものではない。」

「では、なんだと？」

「・・・相互扶助だらう。お前が言つたとおり、共犯者でもあるがな。」

「相互扶助・・・、おい、なぜ入つてくれる？」

「・・・はとたんにいらついた声になる。俺は何でもないようこそ、背を向けて、布団にもぐりこむ。」

「俺のこと有何とも思つていないのでだらう？なら、いいだらう。」

「床で寝る。」

「別にいいだろ？俺はお前になど欲情しないし、それはお前も同じのはずだ。そうじやなきや、俺と一緒に部屋で寝ることすらしない

だろ。」

「それはそうだが、狭くなるだろー。」

その言葉と同時に、C・C・Cはあらうことか俺に蹴りを入れてきた。痛みに耐えかねて、ベッドから出ると、そこには寝転がりながら、勝ち誇ったC・C・Cがいる。

「ふん！言葉で勝てなければ、暴力か？」

「別にかまわんだろう？私は、お前に言葉で勝ちたいわけじゃないのだからな。お前こそ、私を力づくで追い出すという、選択肢はないのか？」

挑戦的なその言葉に乗つてしまつたらおしまいだと思つて、俺は部屋を出ることにして、扉へと向かつ。

「負けを認めるのか？」

「違う。のだが渴いたから、水を飲みに台所に行くだけだ。」

「そうか。じゃあ、私は寝るぞ。ルルーシュ」

「ああ、もう好きにしろ。」

そう言って、俺は廊下へと出る。まったく、あいつと付き合いつのは、「一ネリアと戦つよりも大変だと想つ。

捕らわれる前は何をしていたかは知らないが、じつやつて生活していたのだろう。

「ふん、馬鹿馬鹿しい。」

あいつの過去などに興味はない。知ったところでどうなるものでもないだろう。それに、考えなければならないことは、他に山ほどある。

俺は、そんな思考をながら、夜の廊下を月の光を頼りに歩いた。

STAGE 6・はずされたチェック part5（後書き）

STAGE 6 終了回です。次回は騎士団お披露目です。お楽しみに。
では失礼します。

更新がなかなかできなくてすみません。それと、コメントをしていただいた方、返信が遅れてしましました。

僕はユフィのボディガードとして、サクラダイト分配会議に来ている。と言つても、ユフィは見学だけなので、実際には観光のよつなもので仕事とは呼べないかもしない。

開始までにはまだ時間があるので、ホテルのエントランスで僕らはくつろいでいた。

「こんな形で休暇を貰えるとは思わなかつたな」

ふとつぶやくとユフィは少し怒った顔を向けてくる。

「休暇じゃありません。きちんとしたお仕事ですよ?」

僕は苦笑する。その言葉は確かにその通りなのだが、ボディガードと言つても近辺はブリタニア軍がいるし、それほどたいそうなことでもない。まあ、もう一人のボディガードに示しがつかないかもしれないけど、それはそれだ。

「確かに、その通りですね。失言をおゆるして下さい。ですが、ある程度の余裕も必要ですよ」

「それはそうなのでしょうが。貴方にしては、少し緩んでいいませんか?」

「そんなことはありません。と言えば、嘘になるかな」

確かに緩んでいるのだろう。いや、疲れていると言つた方が正しいか。このところ、ルルーシュの監視について連絡を密にしているため、睡眠時間がほとんどない状況だ。

「別に、ついて来てもらわなくとも良かつたのですが……」

「そういうわけにはいかないですよ」

ユフィは自分がどういう立場にあるのか自覚すべきだ。それと、僕が来なければならなかつたのには別にユフィの護衛のためだけではない。

「携帯が鳴つたので、僕は席をはずす。」

「はい、ライ・ストレイドです」

『ストレイド卿。アリスです。今、部屋に到着しました
「わかった。こちらは今、エントランスだ。こちらに来る予定はあるか?』

『今のところは、ないです』

「では、引き続き頼む」

僕は携帯を切って席に戻る。

「お仕事ですか?』

ユフィに尋ねられたので、僕も素直に答える。

「ああ、ちょっとしたね』

そう言って、僕は今回の会議について話題を振る。あまり、先ほどの電話については、触れたくない。というか、その電話に関連している一人がユフィなのだが、知るよしもないだろう。
でも、なんで一緒になってしまふのだろう。休みだからって、わざわざ、ここでなくてもいいだろう。』

STAGE 7：正義行使する者 part 2

ストレイド卿との連絡を終えて、私はみんなのところに床る。するとそこには不穏な空気が漂っていた。ミレイ会長が不気味な笑みを浮かべている。

「な、なんですか？」

「いやあ、さつきの電話、誰にかけたのかと思つてね」

「彼氏……」

「きやあ、ホントに！？」

シャーリーさんが反応するが、私は先を続ける。

「とでも言つて欲しかったのかもしれないですが違います。妹です」と

「ふーん。果たしそれは真実なのでしょうか？」

「嘘言つて、どうなるんですか？」

会長に疑いの目を向けられるが、そもそも会長は生徒全員、ことに生徒会メンバーについては家族関係くらい分かつてゐるはずだ。だから、嘘を言つてもしようがないことは、ここにいる全員がよく分かつてゐるだろう。

「嘘なのですか？」

ナナリーは不安げな声で聞いてくる。素直なナナリーが信じてしまつたようだ。私は内心で舌打ちをしながら、ナナリーの手を握る。

「私は、妹に電話しました」

「嘘じやないです」

「だそうですが？」

「むー、残念。ナナリーが嘘じやないつて言つなら、そのなのよね」ため息をつきながら、本気で残念がるミレイ会長。全く、この人の脳内にはどうなつてゐるのだろうか。

ストレイド卿だけでなく、妹にも連絡を入れておいて良かった。

「それじゃあ、暴露大会を始めましょうか。テーマは恋愛！」

電話をしている間に、何やらとんでもないことを始めようとしていたらしい。今度は私がため息をつきながらもその輪に加わる。興味はないけど、ここで抜けるのも不自然だしね。

特派のトレーラーで、僕は機体チェックをしていた。ランスロットが出撃する状況などないだろうが、一応やつておかなくてはならない。

それにしても、ザザーランドとは比べ物にならない反応速度だ。ザザーランドを基にしたシミコレーーターはこちらが命わせなくてはいけなかつたが、この機体はついてきてくれる。

「どう、スザク君？」

セシルさんが声をかけてくる。

「はい。どこも異常ないです」

「じゃあ、『ご飯にしましよう？』

思わずびくつとなる。音声通信だけで、表情と様子がばれなくてよかつた。でも、それだけの恐怖を感じせるものがセシルさんの料理にはあるのだ。

「時間がなくて、レトルトだけといいかしら」
ほつとした。どうやら、まともな食事がとれそうだ。本人に言つたら、失礼以外の何物でもないけど。いや、はつきりと言つて改善を促したほうが本人のためだろうか。

「はい。大丈夫です」

考えつつも、返事をしてコクピットから降りる。

「あれ、ロイドさんはどこに？」

特派の主任である上司の姿が見えないので、一応聞いてみる。

「シユナイゼル殿下から連絡があつてね。その応対」

シユナイゼル・エル・ブリタニア、皇位継承人第一位にして帝国宰相、特派の監督者もある。しかし、実際はロイドをんに一任している形になつているとライからは聞いている。

「何かあつたんでしょうか」

「まあ、たいしたことではないと思つわ

やうなのだらうか。俺がランスロットのテストパイロットを快く思つていなくて、そのことについての連絡だとこいつとも十分考えられる。

ライを信用しないわけではないが、それでも、皇帝陛下から命令が下れば、僕をクビにすることも考えなくてはいけないはずだ。

所詮は、名譽ブリタニア人でしかないのだから。

「不安でしようけど、大丈夫よ。シユナイゼル殿下は、寛大な方だから」

不安を吐露すると、セシルさんはこいつ言つてくれたが、やはり心配だ。実際にコーネリア殿下は、特派を追い出している。

そこへ、ロイドさんが戻つてくる。満面の笑顔だ。

「おめでとー！発進するかもしれないよ」

「どうじうじうですか？」

「いやあね。ホテルがジャックされたんだって」

さうひと、そして、嬉々として言つ事ではないですよね。ロイドさん。

「何をせうひと言つてるんですか！？」

セシルさんも声を荒げている。ロイドさんは優秀な人物なのだが、人を人とも思つていないところがある。セシルさんの苦労を考えると直したほうがいいと思つ。

しかし、ロイドさんの性格も、先ほどの不安もどうでもいい。ジヤックされたホテルには、ライとコフィ、生徒会の皆、そしてナナリーがいるのだ。

焦る気持ちを抑えながら、僕は言つた。

「詳細を教えて下さい」

私は、ナナリーと共に別の部屋に隔離された。そこへ、恰幅のいい男と、つき従つて二人の男が入つてきた。

「ふふふ。お変りはないようですね。ナナリー皇女殿下？」

恰幅のいい男が話しかけてきた。その声は高圧的で、こちらに好意的なものだとは、到底思えない。ナナリーは、少しおびえた様子を見せながらも言葉を返す。

「・・・どなたですか？」

「そうですね。お忘れでも、無理はありますまい。私は日本解放戦線の草壁である」

草壁と名乗る男は声を張り上げる。そんなに大きな声を出さなくとも、聞こえるわよ。

私がそんなことを考えていると、草壁はこちらを睨みつけてきた。表情には出してはいけないが・・・。

「ナナリー様。今、私がここに来たのはお願いがあるからです。我々にお力を貸しして頂きたい」

ナナリーは、身をこわばらせた。警戒度が一気に最大まで上がっている。彼女は表情を曇らせることはあっても、強張らせるることはまれなのだ。微妙な変化なので、この場では、私にしかわからないかもしれないが・・・。

草壁はさらに、高圧的に言葉を放つてくる。

「「コーネリアと交渉していただきたい」

「嫌です。あなたたちの行動は間違つてていると思います。こんなに、多くの人を巻き込んで！」

「それをやらせているのは誰だと思っている…？」ブリタニアは間違つていないのか!? それに、あなたは恨んでいないのですかな? あなたを捨てたブリタニアを!」

気丈に言い返すナナリーだったが、さらに高圧的な態度で迫つて

くる草壁。私は、ナナリーに握られた手を、ぎゅっと握り返すことができない。ナナリーがいる以上、下手な真似をすることはできない。

「それでも、私はあなたたちに協力することはできません」

「そうか。だが、こちらも引き下がるわけにはいかんのだ！」

そういうて、草壁は刀を引き抜き、私に突きつける。そして、ナナリーにこう言った。

「どうしても嫌だとこうのなら、ナナリー様の友人の首が飛ぶことになります」

「…」

ナナリーの雰囲気が変わる。脅しが効いているのだろう。あからさまに、動搖してしまっている。

「なんて、卑怯な……」

「どう申されようと結構。三十分後にまた来ます。それまでに『決断を』

ナナリーに向かつてそう言い放つと、彼らは部屋を出でいった。さて、どうしたものか、おそらく、外に一人は見張りがついているだろう。

様子を伺うために、扉に近づいて耳をそばだてる。しかし、防音処理がされているのか、外から音が漏れてくる気配はない。

「何とかしなくちゃ……」

そう呟いたのはいいが、今の私にはどうすることも出来ない状況だった。せめて、ストライド卿と連絡が取れればいいのだが、携帯は取り上げられている。そりに言えば、武器もない。なんて、無様で無力なのだろう。

「アリスちゃん……」

ナナリーが私に不安げな声で話しかけてくる。

「大丈夫よ。きっと大丈夫だから」

「ごめんなさい。私のせいだ」

「気にしないで」

私は本心からそう思つている。ナナリーを守るのが私の仕事で、それ以上にナナリーは大事な友人だから。

私は、ナナリーの手を握る。ナナリーは、ほっとしたように笑顔になる。

そのとき、突然、扉が開いた。

「民間人を助け出す」

河口湖に向かうアジトの中で、誰にともなく俺は宣言する。その言葉に、集まつた新宿のレジスタンスグループの一部は怪訝な顔をする。まあ、少なくとも全員が疑問に思つてはいるはずだ。

「なあ、ゼロ。教えてくれないか？ 民間人とはいっても、ブリタニア人だ。救う理由なんて……」

その疑問を解消すべく、扇が俺に言葉を投げかける。

「その通りだ。しかし、考えてみる。草壁たちの行為に何の意味がある？ なにもありはしない。彼らは、自分たちの存在を誇示したいだけだ」

「確かにそうかもしだいけどよう。それでも、ブリキ野郎を助け出すのには抵抗があるぜ」

俺はすべてを話したわけではない。不満があるのも当然だろう。「違うな、間違つている。本気でブリタニア人と戦うなら、今までとは認識を変えなくてはいけない。ブリタニア人と戦うという、考えではなく、ブリタニアという国と戦うと考えなくては駄目だ。ブリタニアの人々も体制がこうだからといって、無差別に攻撃されたのではたまつたものではないだろう。例えば、玉城、お前は生まれたばかりの赤子まで、ブリタニア人だからといって殺すのか？」

「そ、それは、さすがにしだけれどよ……」

「そうだろう。それと同じことだ。その為に我々は、正義を行う！ レジスタンス達は渋々納得したようで、出発の準備を始めた。俺は一人、自室へと向かう。

内心ではほつとしていた。これは、騎士団のデビューという意味合いがあるが、しかしながら、私情もはさんだ作戦だからだ。草壁たちが立てこもつてあるホテルには、生徒会メンバー。そして、何よりも大切なナナリーがいるのである。今動かなくては、だめな

のだ。

「C・C・準備はできているのだろうな？」

自室に戻ると、俺は自室のソファーで、くつろいでいるC・C・に問いかける。今回の作戦では、C・Cの力も重要な役割を演じてくるのだ。

「ああ」

「仕事が早いな。お前にしては」

「ああ、お前に死なれては困るからな」

俺が皮肉交じりに、発した言葉にC・C・は大まじめに返答してきた。そして、さらにこう付け加える。

「なあ、システム童貞坊や？」

いつもの通りだった。

しかし、こちらも慣れたもので、軽くあしらうことにする。感情的になるからいけないのだ。

「まあ、否定はせんよ」

「なんだ、つまらん」

「すまないな。今は、構つていられる状況ではない」

「まあ、そうだらうな」

「そういうことだ」

俺は、そう言いながら、パソコンに向かう。コーネリアの動きを確認するためだ。俺の推測が当たつていれば、まだ、攻勢には出ていなはずだが……。

「ストレイド卿からの連絡は？」

「いえ、ありません」

私は焦っているのだろう。声がいつもよりも厳しいのがわかる。コーエミアが捕らわれている。ライの身にも危険が及んでいるかもしれない。実際に民間人が一人殺害された。しかも、ことごとく作戦は失敗し、地道の突破もテロリストの用意した兵器によつて失敗している。

しかし、テロリストに屈するわけにはいかない。

「特派を使つてはいかがでしようか。囮くらいにはなるかと」「特派を？」

ダーレトンの言葉に私は逡巡する。それは、私の理念に反する。ナンバーズを囮に使うなど……。

いや、私が言えた義理ではない。ライが言つており、私はそんなことを考えていいほど、甘い立場にはいない。

そう、私に求められているのは勝利だけだ。

「殿下。ゼロが、ゼロが現れました！」

私が決意をしたところに、奴はやってきた。

* * * * *

テロリストたちは、銃器で僕らを脅し、食糧貯蔵庫に放り込んだ。今もその状況は続いている。僕は動こうにも動けなかつた。民間人に犠牲が出る可能性が高いし、下手に動いても、密集度が高すぎて、失敗するのは目に見えている。

とりあえず、コフィの正体はテロリストに知られていないのが救いといったところだろう。彼女を利用されるようなことになれば、コネリア殿下も屈服してしまうかもしない。

ただ、先ほどテロリストに連れて行かれた男性がまだ戻ってきていない。殺害されたと考えるべきか……。だとすれば、あまり時間は残されてはいないかもしね。

さらに、アリスとナナリーのことも心配だ。どこか別の部屋に閉じ込められているのだろうか。

だが、なぜ？

考えられるのは、草壁という男が、ナナリーが皇女であることを知つていて、交渉に使おうとしていることだ。

それは、色々と都合が悪い。

「お姉さまは動かないのでしょうか」

ユフイが静かにつぶやいた。それは、本当に小さな声だった。下手をしたら、僕も気づかなかつただろう。

「そうだな。君がいる限り、総督が強攻策に出ることはない」

殿下はユフイを溺愛しているから、正面突破はしてこないだろう。それ以外の策も、今の状況を考えると失敗しているか、実行されていなかのどちらかだ。

ユフイはほっとしたような表情になる。

「それなら、まだ時間はありますね」

僕は不穏な気配を察知して口を開こうとしたが、それと同時に声が上がる。見ると、テロリストの一人が少女の腕をつかんでいた。よく見るとその少女はニーナだった。

必死に抵抗しているが、このままでは何をされるか……。

「いけません。副総督」

もう一人のボディガードの声に振り向くと、ユフイが立ち上がっていた。

「その人を離しなさい」

しまつた。最悪な展開だ。この後に続く言葉はおそらく……。

「私をあなた達のリーダーに合わせなさい。私はブリタニア第三皇女、ユーフェミア・リ・ブリタニアです」

やはり、交渉に行くつもりだ。こうなつたら仕方無い。どよめき

が起こり、その場の全員が彼女に注目している中、僕もすっと立ち上がる。

「ライ？」

テロリストが僕の方をいぶかしんで見ているのを尻目にコフィーとテロリストに告げる。

「交渉をさせてほしい。彼女の身分は僕が保証する」

「誰だ。お前は！？」

「ライ・ストレイド。母は皇霧江。これだけ言えればわかるだろ？」「な！？裏切り者の……。そうか、お前がストレイド公爵の息子か」テロリストの言葉に、少しだけ顔を歪ませる。

「ああ。そうだ」

「わかった。こちらへ来い」

二一ナから手を離し、手招きするテロリストのもとへ向かう。スザクにまた怒られそうだな。

STAGE 7：正義行使する者 part 7

ゼロがホテルに交渉に向かつたらしい。だが、そんなことはどうでもいい。今は作戦を成功させることだけを考えよう。

ランスロットが地道に降ろされ、前を見据える。前方には敵の兵器がある。突破するとすれば、確実に撃破しなければならない。

新宿ゲットーの時とは違う。今回は本当に生身の人間を殺さなければならないだろう。だが、迷いはない。あそこには、大切な人たちがいる。その人たちを守るためなら、何度も人を殺し、生き残る。

この繰り返しを、僕は生きている限り続ける。その先に救いがないとしても、それで、少しは日本人に対する風当たりが減ると信じて……。

もちろんこれは、独りよがりな意見だ。でも、誰に非難されようと構わない。誰かを不幸にするのも構わない。
だから……。

「ランスロット、MEブースト」
「ランスロット、発進！」

セシルさんの声と同時にランスロットを全速で発進させる。しばらく進むと前方からは散弾が襲いかかる。

即座に反応し、回避。損傷はない。

「よし、いける！」

* * * * *

テロリストに連れられて、リーダー 草壁と言つただろうかのいる部屋に辿り着いた。そして、部屋に入ろうとした瞬間。銃声が鳴り響いた。

「中佐！」

テロリストの一人が中に突入するが、肩を撃たれてうずくまる。

その視線の先にはゼロがいた。

「落ち着きたまえ。中佐たちは自決なされた。行動の無意味さを悟つたのだ」

この状況で？

そんなはずはない。草壁たちは優勢に立つてゐる。コーネリア殿下が攻勢に出られないのだから、それは確實だ。それに、最初に僕ら人質に向かつて言い放つた言葉を見ると、自尊心が高そうな気がする。そんな人間が自殺をするとは思えない。

だとすれば、答えは一つ。ゼロは草壁たちを操つたのだ。そうでなければ説明がつかない。

「ユーフェニア副総督とそちらのボディガードの方、こちへお入り下さい」

まずい。ここでコフイが操られたら……。

僕はとっさに言葉を紡ぐ。

「いいのかな？僕は君を取り押さえることもできるけど……」

「無理だな。廊下を見てみたまえ。今、君達には複数の銃口が向けられている」

ゼロに意識を向けつつ、廊下に目をやると、数人が黒服に黒のサンバイザーという格好で僕らに銃を向けていた。

なるほど。下手に動けば、蜂の巣か……。

「わかりました。それに、私もお話したいことがありますし」

僕らは部屋へと入る。

コフイは冷静だ。だが、油断は出来ない。ゼロがルルーシュであるとそうでなかろうと。

「ゼロ。率直にお聞きします。なぜ兄を、前総督を殺したのですか？」

コフイの言葉をどう思つてゐるのかは、仮面に隠されてよくわからない。だが、何ら動じていらない様子を見ると、何とも思つていないのだろう。

「理由は一つ。一つはシンジュク・ゲットーの日本人虐殺を命じたこと」

ゼロは語り出す。確かに、それは事実だ。クロヴィス殿下が行つたことは許されることではない。しかし、それを語ることはお前があの場にいたことを示している。あの場のことは、民間には伝わっていない。

「もう一つは、彼がブリタニア皇帝の息子だからです。そう言えば、あなたもそうでしたね」

ゼロは銃を向け、僕はコフィイをかばう。

「しかし、今は……」

撃つつもりはないようだ。ほつとしながら、ゼロを見据えていると、部屋に人が入ってきた。

「ゼロ、脱出の准备はできた。もう一つの仕掛けも、もうすぐ終わる」

「そうか。この一人を案内しや」

そう言つとゼロはわざと部屋を出て行つとする。

「何をするつもりだ」

去り際にかけた僕の言葉に、ゼロはあざ笑つかのような口調でこう言つた。

「ちょっとしたショウだよ」

五回目の攻撃も何とか防ぎ、さらに接近する。しかし、それに従つて回避に使える領域は、どんどん狭まっていく。

「うなれば、ここでヴァリス（ライフル）を使うしかない。それを伝えるとセシルさんは悲鳴に近い声で止めてきたが、そんなことを悩んでいる暇はない。やらなければ、こちらがやられる。「爆風は覚悟の上です！」

そう言って照準を合わせる。そして、敵機が弾丸を放った瞬間。こちらも同時にトリガーを引く。ヴァリスの弾丸は敵の弾丸を破壊し、さらに敵機に届く。

直後、爆風が荒れ狂い、トンネルに大穴を開ける。とっさにそれを利用して、水面上まで飛び出ると、ライフルの設定を変更。そして、目標物である柱を撃つ。

ビルが揺れ始めた。何事かと思いながら、窓の外を見ると、あの時の白兜が見える。ええい。またしても邪魔するつもりか。

『ゼロ、準備完了。いつでもいいわ』

ちょうどどいいタイミングだ。では、始めよつか。正義の味方を。

ホテルの中にゼロの姿を認めたが、その直後、ゼロは何かのスイッチを押した。同時にホテルから爆炎と煙が上がり、崩れ去つていく。

「みんな！」

そう叫んで、何も考えずにその中にランスロットで飛び込んだ。

煙が晴れる。白兜は健在のようだ。しぶとい奴。

……まあいい。

周囲からスポットライトが当たる。

「ブリタニア人よ。動じることはない」

俺は人質を助けたことを告げ、さらに宣言する。

「人々よ。我々を恐れ、求めるがいい。我々の名は黒の騎士団」
ライ、ユフイ、そして、コーネリアよ。見ていろ。これが、俺の
ブリタニアを破壊する戦いの始まりだ。

「私は、ブリタニアの思想すべてを否定しない。しかし、強者が弱
者を一方的に殺すことは許さない」

そうだ。ブリタニア皇帝。俺は絶対にお前を許さない。俺とナナ
リーを捨てたお前を、母さんを見殺しにしたお前を、そして、弱者
を「ゴミ」以下として扱うお前を、俺は許さない。

「前総督クロヴィスはシンジユク・ゲットーで日本人を虐殺した。
だから、制裁を加えたのだ。そう、撃つていいのは撃たれる覚悟の
ある奴だけだ」

必ずや、皇帝を倒し、ブリタニアを破壊し、こんな腐った世界を
変えてやる。

「力ある者よ。我を恐れよ。力無き者よ。我を求めよ。世界は、我
々黒の騎士団が裁く」

そして、ナナリーが安心して暮らせる世界を……。

STAGE 7・正義を行ふ者 part 8 (後書き)

騎士団お披露目会終了です。次回をお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1954f/>

コードギアス反逆のルルーシュ 幻影のライ

2010年10月12日19時01分発行